罪と罰～混沌の魔石～

ohmori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪と罰～混沌の魔石～

【Ｎコード】

Ｎ７０３１Ａ

【作者名】

ｏｈｍｏｒｉ

【あらすじ】

邪神カオスが創り出した『混沌の魔石』。それの出現とともに伝説上の怪物『魔物』が現れる。魔石と魔物の関係は…。そして、混沌の魔石を宿ってしまった主人公クラウスの運命は…。

～第一章　運命の始まり～

～プロローグ～

まさに地獄と言うべき光景が広がっていた。
崩れ落ちる民家、焼け爛れた死体。

「…俺の…せい…なのか……」

一人の少年が呟く。
だが、返答は帰ってこない。
崩れる瓦礫の音…、そして、猛威を振るった火の音はまだ幼い少年の頭に刻み込まれた。

～第一話　伝説の魔物～

「行ってきまーすっと」
元気の良い、少年の声が聞こえる。

彼の名はクラウス。
この村に住む、少年。
頭にバンダナをし、革の鎧を身につけている。

頬には、なにかしらでできた傷が痛々しく残っている。
「待っててば！私も一緒にいく！」
いかにも、お転婆そうな、少女の声が響く。

彼女の名はリーネ。
この村に住む、少女。
髪をひとつに結び、クラウスとは対照的に軽装備である。
「もう！まだ準備できてないって言ってるでしょ！？」
少女は頬を膨らませながら言う。

「だってよぉ、お前が遅いんだろ？
　この時間帯にしか、猪は出てこないんだぜ？」

この村には、国からの援助は全く来ない。
それもそのはず、強欲な王、キヴァード＝レイが全ての税を自分のために使っているのだ。
よって、若者は昼に狩りに出掛ける事が、風習の様になっていた。
「もう…、私みたいな女の子も狩りに行かないといけないなんて…。」

「それは仕方がないことだろう。
　今、狩りに行ける様な状態なのは、俺とお前くらいだからな。」
「それは判ってるけど…。」
二人は、会話をしながら、村の外れの森へ向かう。

「あ〜、小さい頃は、この森でよく遊んだりしたなぁ。」
「うん…。あの時、私達の年くらいの子なんて、一人もいなかったね…。
カイル以外は…。」
二人は、幼馴染で、よく一緒に遊び、食べ、喜び、泣き、
まさに心の友だった。
「…？」
クラウスは森の異様な空気に気づく。
「どうしたの？」
「…おかしい…。
ここまで深く森に入ったのに…動物一匹顔を出さない…」
森は、沈黙に覆われていた。
鳥の囀りも、草の茂る音も、何もかも聞こえなかった。
「ぐっ！！」
なにか、犬くらいの黒い影が、クラウスを襲う。
「クラウス！？」
「何者…！？」
クラウスとリーネは戦慄を覚えた。

一見、犬のようだが、顔は爛れ、身は今にも崩れ落ちそうなほど、腐りきっている…。

「…魔物…だと！？」

「そんな！魔物のわけ…」

だが、リーネは否定できなかった。
このような奇怪な動物は本でしか見たことがない。
それこそ、まさに魔物だった。

「魔物…それは空想の怪物ではなかったのか…？！」

次の瞬間、涎を垂らして様子を見ていた黒い影がクラウスに飛び掛る。

「くっ…！！驚いていては話にならない！
…応戦だ！！」

クラウスは狩り用の剣を抜き、魔物を払いのける。

「リーネ！！弓だ！弓を使え！！」

「判ったわ！」

リーネは弓を構える。

「はっ！！」

クラウスは必死に見たこともない生き物を相手に、

勇気を振り絞り応戦する。
だが、いくら切っても、魔物は襲い掛かってくる。
「くっ…、こいつ…不死身なのか…？！」
「クラウス、退いて！」
次の瞬間、リーネの矢が魔物に突き刺さった。
魔物は悲鳴を上げ、倒れる。
「はぁ…はぁ…」
「大丈夫？クラウス…」
「心配するな…。怪我はない…」
クラウスは緑色の血を流した魔物の死体を見る。
このような奇怪な生物が…この世に存在するとは…。
それが、クラウスの本当の気持ちだった。
「それより、今すぐ、村に戻るぞ。
魔物が現れたなんて…誰も信じてはくれないだろうが…」
「この死体を持っていくのも…ちょっとね…」
魔物を見たリーネは苦い顔をする。
「とりあえず、村長に報告。俺達だけででも、警戒だ」
リーネは頷いた。

二人で駆け足で村へ戻る。

だが、そこには村はなかった…。

いや…この光景は…。

「そ、そんな馬鹿な…！！」

「…！！」

リーネは言葉にもできなかった。

元々、村だったそこは…クラウスがかつて見た…地獄の光景だった…。

「うわぁぁぁぁぁ！！！！」

クラウスの声だけが虚しく響いた…。

～第二話　逆らえぬ運命～

「…クラウス…」

二人はただ、呆然と立ち尽くすしかなかった…。

「二度と…二度とこんなこと…起きてほしくなかったのに…！！」

明らかに、魔物の仕業だった。
死体は、噛み砕かれ、溶かされ…。
まさに、地獄絵図だった。

「おっとぉ？これはどういう事かな…？」

聞き慣れない声が聞こえた。

「誰だ？！」

「あ～、悪いね…。僕は旅の者さ。
ここら辺に村があるって聞いたけど…まさかここ？」

明らかに、軽そうな青年だった。
髪を長く垂らし、顔は整っていた。
服装は、まさに旅人と言ったところだった。

「そうですけど…魔物に…」

リーネが顔を手で覆う。

「ああ～そうみたいだねぇ…。
僕もさ、魔物に村をやられて出てきたんだよねぇ…。」

「な、なんだって？！」

クラウスは驚きを隠せなかった。

魔物がここだけではなく、他の村にも…。
これは一大事だった。

「魔物の被害は、どこまでいっているんだ…？！」

「そうだねぇ…。小さい村はもうどこも駄目なんじゃないかな？
大きい町は大丈夫そうだ。」

「そうか…。」
クラウスは顔を暗くする。

「君達も、行くとこないなら一緒に来ない？
君…強そうだし、女の子の方は、弓を使えるようだね。」
それぞれの武器と顔を指差しながら、青年は言う。

「…名は？」

「ゼアだ。」

「俺の名はクラウス。
こっちがリーネだ。
よろしく頼むぞ。」

「おお、一人じゃ心細くてねぇ。
助かるよ。
一応、僕も剣には自信があるんだ。
魔物が現れても、僕が倒すよ。」

「ああ、お手並み拝見…といこうか。」

「あ、あのリーネです！よろしくお願いします！」
緊張気味に、リーネはゼアに言った。

「うん。よろしく。」
にっこりしながら、ゼアは言った。

「行く当てはあるのか？」

「そうだね。行くとしたら、やはり王都だね…。
王にこの事を知らせよう。」

それを聞いたクラウスは顔を引きつらせる。
「…王に？あの腐った奴に何を言っても無駄では？」

「ありゃりゃ。仮にも俺たちの王だよ？
そんなこと言っていいの？」
半分笑ったように、ゼアは言う。

「奴は…村になど見向きもせず、ただ、自分の野望だけに生きている男だ。
慈悲したところで何をすると言うんだ…！！」

クラウスは自分の中に貯まったものを吐き出した。

「じゃあ、クラウス君。
他に手はあるのかい？」
ゼアはにんまりしながら言う。

「それは…。」
クラウスは返事に戸惑った。

「クラウス！ここはゼアさんに従ったほうがいいよ！」
「…仕方がないな…」
クラウスは負けを認める。
「王都は遥か東…。
しかも、船じゃないといけない。
僕ら貧乏人には夢のような話だけど…神様が何とかしてくれるさ。」
ゼアはやはり笑いながら言う。
「神頼みは好きじゃないがな…。
今回ばっかりは、そうも言ってられないか。」
暗かったクラウスの表情が、晴れた。
「うんうん！その意気その意気！」
リーネはクラウスを励ます。
「では、行こうか。
まずは、フィーレの町までだ。
それまでは、魔物に会う可能性も高いだろう。
準備はいいね？」
「当たり前だ。」
「うん！よし行こう！」
クラウスとリーネが同時に言った。
こうして、運命の糸に導かれし者は旅立ったのだ…。

～第三話　ゼアの秘密～

フィーレの町まで行くのに、山を越えなくてはならなかった。

「さすがだね。クラウス君。
　僕なんかよりもかなり強いねぇ。」
にこにこしながら、魔物をレイピアで刺していくゼア。

クラウスは驚愕していた。
まさか、あの軽い男がここまで剣を使えるなんて…。

クラウスも初めて見る、レイピアという剣…。
刺す事を重視した、細身の剣。
それを、舞うかの如く操るゼア。

リーネはただ、唖然とし立ち止まるしかなかった。

「よし。ここの敵は一掃したようだね。
　お疲れ様。」
ゼアは、剣についた血を拭いながら、やはりにこにこして言う。

「て言うか…ほとんど、ゼアが倒している…。
　それはこっちの台詞だ。」

クラウスは少し不貞腐れているようだ。
「すごいんですね…ゼアさんって…。」
リーネは驚きの色を隠せない。
「なぁに。少し、訓練は受けたからね…。」
ゼアはやはり微笑んでいたが、眼には悲しみの色が浮かぶ。
クラウスは少し疑問に思ったが、あえて、口にはしなかった。
「山頂までまだ距離がある…。
日も暮れてきたし…頂上までいけるか…。」
「野宿しかないだろう。
だが、魔物は容赦なく襲うであろうがな。」
「大丈夫。魔よけのお香を持って来ている。
魔物全般に関して言えることだが、どうやら、浄毒草を煎じた匂いが苦手らしい。」
そのお香らしきものを袋から取り出した。
「すごーい！よく判りましたね！」
リーネは尊敬の眼差しを見せる。
「…どうして判ったんだ？」
クラウスは鋭い眼で、ゼアを見据える。
「魔物に攻撃されて、毒を受けたとき、浄毒草を煎じて飲もうとしたんだ。
そしたら、煎じている間魔物が寄りつかなくて…まさかと思った

わけだよ。」

「…そうか。」

「では、登ろうか。
なるべく山頂近くまでは行きたい。」

三人は歩き出す。
だが、クラウスは、ゼアへの疑問を考えてばかりいた。

「疲れたぁ…。私もう駄目…。」
リーネが尻餅をつく。

「ゼア…。ここらへんでいいんじゃないか？」
クラウスはリーネの体力を考慮し、提案する。

「そうだね。レディの体のことは配慮しないとね…。」
キラキラ光る眼をリーネに向けながらゼアは言う。

「…ありがとうございます…」
リーネはゼアにうっとりしながら言う。

「ねぇねぇ、クラウス！私のことレディだって！」
クラウスの肩を持ち、揺らしながらリーネは言う。

「はいはい。ようございんしたね。」
半分呆れながら、半分不貞腐れながらクラウスは言う。

「なぁに？やきもちやいてるのぉ？」
リーネがにんまりしながら言う。

「な?！んなわけねぇだろ…。」
多少、顔を赤らめながらクラウスは言う。
「へぇぇ。純情少年だね。クラウス君?」
ゼアもにんまりしながら、クラウスをおちょくる。
「くっ…。」
クラウスは思った。ああ～ここには敵しかいないのだと。

とりあえず、近くの寝れるような場所を探し、暖をとった三人。
リーネはよほど疲れていたのか、すぐに眠りに入る。

「なぁ…。」
クラウスはゼアに言う。

「なんだい?クラウス君。」
お香を周りに置きながら、ゼアは応答した。

「お前…何か隠してないか?」
クラウスはおもむろに聞く。

「…君には負けるね…。さすがの洞察力…といったところか。」
ゼアにはいつもの微笑ではない、特別な笑みを浮かべる。

「ふん…。観察していれば、誰にでもわかる。」

「悪いけど…まだ教えるわけにはいかないよ。」

ゼアは表情を崩さず、静かに言う。

「だろうな…。だが、お前は普通の人間ではない。それだけはわかっているつもりだ。」

「そうだね…。きっと君にもわかる日が来るさ…。」

「ふん…。」

クラウスはどこか、ゼアに嫉妬している自分が嫌だった。
なぜかは判らないが、ゼアは自分の足元にも及ばない人間だとクラウスは感じていた。

「ところで、リーネちゃんとはどういう関係？」
ゼアは途端にいつもの笑みに戻る。

「あのな…。別に、どんな関係でもない…。
ただの…幼馴染さ…。」
少し、クラウスの表情が曇る。

「それだけ…かい？」

「…。」

「まぁいいや。いずれ、それも判る日が来ることを楽しみにしているよ。」

「ふん…。勝手にしろ…。」

ゼアの前では、必要以上に気が立ってしまう。

そんな自分が嫌で嫌で仕方がなかった。
こうして…旅立ってから初めて夜を迎えた…。

～第四話　ツッコミ上手（？）なクラウス～

小鳥の囀る声が聞こえる。
「ん…。朝か…。」

クラウスは周りを見る。
リーネはもう目を覚まし、薪を拾いに行っていた様だ。
「おはよー。クラウス」
リーネはクラウスに、にっこり笑いかける。

「ああ…お早う。ゼアはまだ寝てる？」

「うん…。ぐっすりね。」
クラウスとリーネはゼアの顔を覗き込む。
その顔はまさに熟睡だった。

「リーネ。水。」

「はーい。」
クラウスはリーネに水を持ってくるように指示した。

「持ってきたけど…どうするの？」

「んなの決まってるだろ。」
クラウスはそういいながら、水が入った容器のキャップを外す。
そして、ゼアの顔の真上に翳し、容器を９０度回転させた。

「うわわわわわ！！」
見事にゼアの顔に水がかかる。
クラウスはにやりと歯を見せる。

「な、なにしてんの？！」
リーネは驚愕の顔をしていると思いきや、笑いを堪えていた。

「クラウス君…。僕は朝に弱いんだよ…。
もう少し寝かせてくれ…。」
といいながら、ゼアはまた夢の世界へ入っていく。

「…ど根性なのか、鈍感なのか判らん…。」
クラウスは呆れ顔だ。

一時間後…。

「おはよう！君達！
今日も頑張ろうか！」
ゼアはさわやかな笑顔を見せる。

「…さっきまでダウンしていた男が…」
クラウスはお香が切れて、魔物がどんどん押し寄せてくるのを、一時間も耐えていた。

「あんな近距離じゃ…私の弓も役に立たないし…」
リーネはクラウスの陰に隠れるしかなかったことが悔しかった。

「あぁ～悪かったね2人とも…。
僕はめっぽう朝に弱いんだ…。」
まだ、眠そうなゼアの顔に、責任と言う名の錘が圧し掛かる。

「今回は許す。怪我人は誰も出なかったのは、不幸中の幸いだ。」
クラウスはそう言うも、今にも倒れそうだ。

「次から気をつけてください。」
クラウスの様子を気遣いながら、リーネも言う。

「ああ。今回は許してくれ。
次からは必ず、君たちを守ろう。」
ゼアは本気で深く反省しているようだ。

「…許すといっている。
反省するのはいいが、支度を早くしろ…。」

「忝い…。」
そういって、ゼアは支度を始める。

「ねぇ…。クラウスってゼアさんと話すとき口調変じゃない？」
意表をつかれて、クラウスは内心ビクっとする。

「…それは俺も否定はできないんだ…。
何故なんだろうな…。」
幼馴染に痛いところをつかれ、顔が暗くなる。

「クラウス…。
あなたは強い…。
だから、負けないで。」
リーネは真剣な眼差しでクラウスに言う。

「ゼア…よりもなのか…？」
クラウスは不意に思ったことを言う。
リーネも何も言えなかった。

「さぁて、こっちは準備ＯＫだ。
今日中には、フィーレの町に着くと思うよ。」
ゼアはさっきの暗い顔はどこへやら、にっこりしながら言う。

「ああ…じゃあ…行くかぁ…。」
クラウスは完全に呆れ顔で、やる気がひとつも感じられない言葉を吐く。

「はいはい。元気出して、行ってみよ～！」
いつも通りの元気なリーネの姿を見て、クラウスはさらに呆れ顔になる。
だが、どこかほっとしたクラウスであった。

「はっ！」
クラウスの声が響く。

「くっ…さすがに町近くになると、敵も手強いな…。」

あのゼアの顔が、少し歪んでいる。

「ゼアさん、なんで魔物が強くなってるの…？」
ゼアは魔物を払いながら、リーネの問いに答える。

「魔物が出現しているポイントを知っているか…？」
そういっている間に、一匹の鳥形の魔物を屠る。

「それって…！！まさか、王都からとか！？」
リーネは驚きながらも、一匹の獣型の魔物に一閃入れる。

「アハハ。そうだったら、王都は壊滅してるよ…。」
笑いながら舞い、また一匹魔物を屠るゼア。
しかし、最後の言葉になると、表情は沈んで見えた。

「出現ポイントは、どうやら、王都のさらに東にある、
帝国エヴァーノの近辺。
だと言うのに、エヴァーノはまだ健在らしい…。」
ゼアは、考え込む仕草を見せるが、その間に三匹の魔物を屠った。

「臭いな…。」

「え？僕はしてないけど…。
まさか、リーネちゃん？」
ここぞとばかりに、ゼアは一番のにんまり顔を見せる。

魔物をある程度屠った後、クラウスはゼアに向かって走り出す。
「ちょ、ちょっとクラウス君？！じょ、じょうだ…」
次の瞬間、クラウスの拳がゼアの頬にめり込む。

「ぐ、は・・・。」
7mほど、ゼアは飛んだ。
リーネはあえて何も言わなかった。
リーネの頬は赤く、膨れていた。
と同時に、ゼアの頬も赤く、腫れていた。

「覚えておくといい。
俺の前でふざけた事は言うな。」
クラウスは、クールを装っていたが、口元が引き攣っていた。

「たまには、ギャグもいいじゃないか…。
シリアスばかりだと、身が持たないだろう？」
頬をさすりながら立ち上がり、近づいてきた魔物をレイピアで一掃する。

「俺はお前のようにやわじゃない。」
そう言いながら、クラウスは周りの敵を回転切りで殲滅する。
リーネは一応、弓でゼアを援助する。

「はいはい。もういいですから、町に向かいましょう。」

「そろそろ坂になってきた…。
一気に駆け抜けよう！」
ゼアの合図と共に、三人は坂を駆ける。

「あれが…フィーレの町…。」
クラウスの目の前に広がるのは、クラウスとリーネはまだ見たこと

もない大きな大きな町だった…。

〜第五話　フィーレの町〜

「人が…たくさんいるな…。
俺はこういうのは苦手だ…。」

人々は忙しそうに、あっちへこっちへ…。

「今は、魔物が出たという話題が持ちきりだろう…。
武器屋と防具屋は大繁盛だろうがね…。」

「武器屋とか防具屋なんてあるんですね…！
すごいなぁ…」
リーネはキラキラ目を光らせながら言う。

「なら、俺は武器屋に行ってみよう。
この武器じゃ、これからの戦いでやっていけないからな。
ゼアはどうするんだ？」
クラウスは一回、自分の木製でできたボロボロの剣を見て、
そして、ゼアを見て言った。

「僕は少し用事があるから、いろいろ見て回るといい。
この広場で落ち合おう。

君たちはお金がないだろう？これをもって行くがいい。」
そう言って、ゼアは何かが入った袋を渡す。

「…金か？」

「そう。僕は用心棒もしてたから、お金は一応持ってるんだ。船に乗るほどのお金はないけどね。」

「…そうか。受け取っておく。」
そう言ってクラウスは、差し出された金を受け取った。

「リーネ行くぞ。」

「うん。ありがとう、ゼアさん。」
にっこり笑ってリーネはゼアに言う。

「うん。じゃぁね。リーネちゃん。」
ゼアもやはりにっこりしてリーネに言う。

ゼアと別れ、クラウスとリーネは武器屋に向かう。

「いらっしゃいませ～」
気前のよさそうな、中年のおじさんが迎えてくれた。

「剣を見せてくれないか？」

「はいはい。どんな剣をご要望で？」
にっこりしながら、店主は言う。

「剣に種類があるのか？」

「はい。もちろんですとも。
片手剣に両手剣、あと、双剣もありますよ。」

「双剣…？」
クラウスは初めて聞く名前だった。
その名前から連想するのは、二つの刀…。
つまり二刀流だった。

「はい。その名の通り二つの剣。
片方の剣で受け流し、もう片方の剣で斬るというのが一般的な戦い方ですよ。」
にこにこしながら、店主が教えてくれた。

「そうか…。では、その双剣を見せてくれ。」

「はい。ただいま持ってきますね。」
そう言って店主は、奥の扉にを開け、部屋に入っていった。

「双剣…。そんな剣もあるんだね…。」
初めての武器屋にきょろきょろしながら言うリーネ。

「両手剣は重くて使い物にならないだろうからな…。」
そう言っていたら、店主が数種類の双剣を持って奥から出てきた。

「はい。当店では、四種類の双剣を扱っております。
ひとつは、ツインソード。
リーチは短いですが、軽くて使いやすく、値段も手ごろです。
これが、ファルシアム。
ファルシオンという片手剣を基調とした双剣です。

値段、性能は普通です。
これは、双龍剣。
竜の姿が描かれている双剣です。
他の双剣よりも、少し性能がいい代わりに値段が高いです。
そして、一番性能が高く、値段も高いのが、この
ヴォルノ・エッジです。
光の速さで敵を切りつけ、炎で殲滅させる、火属性の剣です。
さてどうしま…？」
そう、言い終わらないうちに、クラウスはひとつの双剣を手に取る。

「ヴォルノ・エッジをいただこうか。」
店主もリーネも目を丸くする。

「ちょ、ちょっとクラウス！？
これはゼアさんのお金なのよ？
ちょっとは遠慮しないと…。」
恐る恐る、リーネは言う。
しかし、
「いや、こんな大金を渡した奴が悪い。」
クラウスは言い放つ。

リーネは思う。
そうだ…クラウスはそういう人だったんだと。
クラウスは何をするにも遠慮を知らず、村の人達から正直な男と言われていたのだった…。

（ゼアさん…。どう思うであろうか…。）
リーネは心の中でゼアに謝った。

「お、お買い上げ、ありがとうございます…。」
店主はまだ驚きの色を見せていた。

「リーネも何か、矢を買うがいい。」
クラウスは剣をまじまじと見ながらリーネに言う。

「あの…一番安いの…お願いします…。」
なぜか、リーネは罪悪感を覚えていた。

「まさか…お前が私に頼みを乞うとは思ってもみなかったな…。」
冷静な女の声が聞こえる。

「魔物が現れた今…、王都はいずれ滅びる。
その時は、混沌の魔石を持つ者を守ってくれ…。」
ゼアはいつもの微笑みは消え、真剣な表情で女に頼みこむ。

「ついに…動いたのか…。」

「魔物は魔石目掛けて飛んでくるだろう…。
彼は…負ける…。」

「その代わり、王都は戴く。
魔物が来る前にな…。」

「ああ、手配しておこう。」

「しかし…いいのか？」

「誰もあんな王など…望んではいない…。
僕が決着をつける…。」

「…では、私はこれで。
約束は必ず守る。」

「ああ、頼んだ。」
二人は立ち上がり、酒場を出る。

ゼアの表情は、終始、沈んでいた…。

～第二章　出会いと別れ～

～第六話　覚醒～

用事が済んだ後、クラウス、リーネとゼアは合流した。
異様に減っている金の入った袋を見て、
ゼアはただただ、大笑いしていた。

「アッハッハッハッハ」

フィーネの町に響く謎の笑い声…。
こんな不況に何故笑えるのか。
町民達は謎の笑い声として一時期噂にしたという…。

「で、次は王都だな？」

「今回は洞窟を通って行かないといけないぞ…。
あの洞窟にいい噂は聞かないんだがな…。」

ゼアの言う洞窟とは、一回入った者は出られないという事で知られていた。
王都につながる唯一の道だが、誰も近寄らない。
よって、どんな悪政を王が行っても、民衆の反乱は全く起こらないという事だ。

「ふん…。どうせ、キヴァードが変な噂を流しただけだろう。

中には何かしら仕掛けでも作ってあるんじゃないか？」
クラウスは少し薄ら笑いを浮かべながら言う。

「クラウス君…。登場当初はもっと明るい子ではなかったかい？
悪役みたいで怖いよ…。」
苦笑いしながらゼアは言う。

「ふん…。これが明るくていられるか。
魔物を倒し、この世界を平和にしなければいけない。
それだけだ。」

「クラウス、言ってる事と顔が合ってないよ…。」

「とにかく、あの洞窟には何かあるんだろう。
そんなもの破壊してやるがな。」
そう言って、町を出るクラウス。

「…クラウス君…。怖い…。」
「同感…。」
ゼアは固まっていたが、リーネは悲しい表情をしていた。

「ここか…。」

巨大な穴が姿を現す。
中から、風が吹き抜ける。
ひゅー、ひゅーと何かもの悲しい雰囲気だ。

「クラウス君、リーネちゃん。多分、この穴も魔物の占領下にあるだろう。
戦う準備はできてるね？」

「当然だ。」
「はい…。大丈夫です！」
同時に答えるクラウスとリーネ。

そして、三人は暗闇に飲み込まれていく…。

今まで陰に隠れていた者が姿を現す。

「…侵入者を排除せよ。」
それだけ言って、その姿は消えた…。

「暗いね…。」
リーネは不安そうに呟く。

「大丈夫、こんな事もあろうかと、ランプ持ってきてるから。」
にこにこしながら、ゼアはランプを取り出す。

「…準備良すぎだろ…。」
クラウスは正直な感想を言った。

「それがゼアさんのいいところじゃない？
お香だってそうだし…。」
やはり、リーネもにこにこしながら言う。

「…。」
クラウスは黙ってゼアを見据えた…。

やはり、ゼアの言った通り、魔物が次々と襲ってくる。
クラウスは新品のヴォルノ・エッジを手に、魔物を屠る。
「はっ！！」
クラウスが斬る度に、魔物は炎を撒き散らし、倒れていく。
「ふっ！！」
ゼアはやはり舞うかの如く、次々と魔物を刺していく。
「やっ！！」
リーネは安物の矢だというのに、確実に魔物を射していく。
「くっ、ここまで魔物が多いとは予想してなかったな…。」
「着実に進むんだ。必ず、出口はある。」
「それはどうかな…？」
洞窟の奥から、男の声が聞こえる…。
「…最初からはめられていたという事か…。」
ゼアは悔しそうに言う。
「その通り。

魔物を操っておられるのは、我が帝王ゼイヴァル様！
我らが王がいる限り、あんたらは王都へ行くことすらできない…。
」
男は薄ら笑いを浮かべながら、こちらに姿を現す。
まるで、男は忍者のような服装だった。
首には特徴的なバンダナをしていた。

「あんたらに怨みはないが、消えてもらうぜ。」
言い終わると同時に、クラウス目掛けて走り出す。

「なっ？！」
気付いたときには遅く、すでに、男はクラウスの懐に来ていた。
そして、手に仕込んだ刃をクラウスに向ける。

「俺はよぉ…無駄に人を殺したくはないんでね。
退くのであれば、見逃してやるぜ…。」
男は呟く。
だが、クラウスの返事は男の考えていたものとは違っていた。

「悪いが…ここまで来て引き下がるつもりは、ない。
ここで、お前を倒し、進むまでだ。」
クラウスは刃をつきつけられたにも関わらず、そう言った。

「なぜ…死を恐れないんだ？」
男は疑問を投げかける。

「俺を刺した瞬間、リーネとゼアが何とかしてくれるだろう。
俺が死のうとも、目的が果たされれば、それでいい。」

「そうかよ…。
なら、殺してやる！！」

「クラウス君！」
「クラウス！」
二人は同時に叫ぶ。
だが、その叫びも虚しく、クラウスの首に刃が突き刺さった…。

「バカな野郎だ…。」
男は刃を引き抜く。
だが、ひとつおかしい事に気付いた。

血がついていない。

「バカな？！
血が流れない人間など！！」

「…いるようだな…。
目の前に…。」
なんと、首を刺されたはずのクラウスが喋りだした。

「…！？」
男も、ゼアも、リーネも驚きを隠せない。

「ぐ…？！
うあああああああああああああああ！！」
クラウスは突然苦しみ始める。

「なんだっていうんだ！？
こいつ…今頃効いたのか！？」

男は何がなんだか分からず、困惑している。

「…。」

突如、クラウスの悲鳴が止んだ。

だが、そこから覗く目は、まるで、操られているかのようだった。

『こんなところで終わっては…全くもって退屈だ…。

少し…力を分けてやろう…。』

クラウスの声とは思えないほど、暗く冷たく貪欲な声だった。

突如、クラウスの周りから閃光が奔る。

次々と出てくる、闇の閃光が、魔物を捕らえ、灰とさせる。

「な、なんだ！？

魔物が…灰に…？」

男は慌てて、すごい速さで逃げていった。

「く、クラウス…！！」

リーネはクラウスの威圧に押されながらも、クラウスに近いづいていく。

「リーネちゃん！？

だめだ！今のクラウス君は普通じゃない！！」

ゼアも、クラウスの威圧に押され、顔が歪んでいる。

「クラウスは苦しんでいるの…！

放っておけない…！！」

ゼアははっとした。

なぜ、この少女がそこまでクラウスを慕い、助けるのか…。

彼女はもう、知ってしまっているのかもしれないとゼアは思った。
「ぐおおおおおおおおおおおお！！」
クラウスもまた、何かに必死になって耐えているようだった。

（…ここは…？）
そこは、異世界とでも言うべき場所だった。
崩壊した建物達が宙に浮いている…。

『アルド、お前はどうするつもりだ。』
クラウスは、奥に見える人影に気付く。

『俺は、こいつを封印しないといけないんでな。』
男は自分の手の甲を見て言う。

次の瞬間、二人の人影は消えた。

（…なんだというんだ…）
奥に、なにやら気配がする。
クラウスは、吸い込まれるようにして歩き出す。

『ぐ、ぐあああああああああ！！』
先ほど、アルドと呼ばれた男が叫びを上げている。

『貴様も…もう戻れないのだよ…。
そう…お前もだ…クラウス！！』
黒い影が、赤い目をむき出しにしてクラウスを睨む。

（くっ…？！なんだ…！？
か…体が動かない…！？）

じわじわと、黒い影が近づいてくる…。
『苦しいだろう…？
今、俺が楽にしてやる…。ククク…。』
（や、やめろ――――！！）
『ウス…クラウス！！』
頭の中に響いてくる声…リーネだった。
「クラウス…！」
リーネはやっとの思いでクラウスの手を握る。
「…来るな…リーネ…！！」
クラウスは歯を食いしばりながら、リーネに言う。
「これ以上…苦しんじゃ…ダメ…！！」
リーネの言葉と共に、クラウスの周りを取り囲む禍々しい空気が消えた。
クラウスとリーネは倒れこむ。
「クラウス君！リーネちゃん！」
ゼアは二人のもとに走り出す。
「こんなに早くに発動するなんて…。
クラウス君…！！」
クラウスの右手の甲に、静かに魔石が宿る…。

～第七話　クラウスの苦悩～

『アルド…。
やはり、運命からは逃れられないのか…。』
アルドの右手に宿る魔石は惑わすような光を放っている。

『イリア！
ここは危険だ！早く逃げろ！』
男が、女に駆け寄り、言う。

『…今行く。』
イリアと呼ばれた女は踵を返した。
しかし、その瞬間、魔石が眩い光を放つ。

『なっ…！？』
魔石がイリアの右手に向かって飛んでくる。

『イリア！！』
その時にはもう遅く、すでにイリアの手に魔石は宿っていた…。

『うあああああああああああああ！！』

「はぁ…はぁ…」

クラウスは右手の激痛で目覚めた。
右手をさすってみると、何か冷たいものに当たった。
魔石だった。

「ここは…。」
家だった。
誰の家かはわからないが、木造の、どこか重苦しい雰囲気のある家だった。

「…。」
クラウスは何かを悟ったように、目を瞑る。

「ヴィオーラ様…。すでに、クラウス君の体には…。」
なにやら、奥から声が聞こえる。

「そんなことは知っていたよ…。
彼の体はすでにカオスに侵されている…。」
少ししわがれた女の声が聞こえた。

「…彼らは何らかのの形ですでにわかっていたような気が…僕にはするのです…。」

「彼ら…?
ああ…リーネの事かい…。」
ヴィオーラの声は全てを悟ったかのような、厳しく、暖かい声だった。

「そうだね…。
クラウスには、なにかしら辛い過去があるのだろう…。

それが…仕組まれたものだと知っているのかもしれないね…。」
クラウスは驚愕した。
仕組まれたものだと…？
つまり…誰かがあんな惨い事を仕組んだという事か…？

「答えろ！！
一体…一体誰がやった！？」
クラウスは思わず飛び出していた。

「…クラウス君…。」
ゼアが悲しい目でクラウスを見る。

「答えろ、ゼア！
誰が…誰がやったんだ…！！」
ゼアのむなぐらを掴み、クラウスが叫ぶ。

「…お前自身ではないのかい？」
ヴィオーラが、静かに言う。

「な、なんだと！？」
クラウスはそう言ったが、否定はできなかった。

「分かっている。
あんたがやったが、それはあんたじゃない。」

「…。」
威厳のあるヴィオーラの言葉に、クラウスは言葉を失った。

「クラウス君。
ヴィオーラ様は全てを見通しておられる。

…それは分かってくれ。」
ゼアはどこか悲しそうだ。
「…俺は…。」
クラウスは言葉が見つからなかった。
「もういい。
あんたはよくここまで耐えた。
あんたがその宿命から逃れたいのなら、その方法を教えてやる。」
「…待ってくれ。リーネと会いたい。
…それはそれからだ。」
「リーネちゃんは二階だよ。
まだ…眠っている。」
ゼアは階段を指差し、言う。
「分かった。」
みしみしと木造の階段が鳴る。
クラウスはリーネに一言、お礼が言いたかった。
今までの事も…あのときの事も…。
クラウスは静かにドアを開ける。
クラウスはリーネの寝ているベッドに近づく。
「…。」
クラウスはリーネの顔を見つめてこう言った。
「お前には…いつも助けられてばかりだ…。

今回だって…今までだって…。」
クラウスは踵を返し、歩き出す。

「…リーネ…。俺のために無理はしないでくれ…。
俺はお前を失いたくない…。」
後ろ向きでリーネに言う。
そして、クラウスはドアを閉めた…。

「…ありがとう。
でも…私…。」

「待たせたな…。」
クラウスは階段を降りながら言う。

「では、クラウス君、座って。」

「分かった。」
ヴィオーラは、手を組んでクラウスに話す。

「ひとつ言える事は…あんたは、混沌の神が今、最も入りやすい、
容器のようなものだという事だ。」

「混沌の神…？
俺が…容器だって？」
クラウスは、頭が混乱した。

混沌の神など聞いた事がない。
それに加えて、俺が容器だと…？
怒りと、悔しさがこみ上げる。

「混沌の神は、亜空間を統べる王…。
　そう簡単に倒せる相手ではない…。」
ヴィオーラは目を瞑って言う。

「…倒す。」

「クラウス君！？
　混沌の神を倒すなんて…無理だとは思わないのか！？」
ゼアは疑問を投げかける。

「なら…俺は宿命に逆らう事もなく、死ぬという事だろう？」

「何故その事を…？」
ゼアは今まで見た事もない顔を見せる。

「親を見たのだろう…。
　灰に変わる…その瞬間を…。」
ヴィオーラが静かに言う。
しかし、深く悲しい、そして少し震えた声だった。

「俺は…何もしないで終わるのは御免だ…。
　抗う事もできないほど、俺は臆病じゃない。」
クラウスは強く言った。
今までの悲しみを振り払うかのように。

「…私も…行きます…！」

リーネが階段から降りてきた。
「リーネ！？
…もう、平気なのか？」
クラウスは、リーネの体を心配する。
「うん…。
大丈夫だよ…。
クラウスの心の傷なんかより…全然深くなんかない…。」
「…聞いていたのか？」
「うん…。」
「ならば話は早いな。
混沌の神の呼び名は、カオス。
５００年に一度…カオスがとりつく人間が現れるという記録が残っている…。
それは、まさに無差別。
どこの国なのかすらも分からない…。
しかし、クラウス。今回はお前が選ばれてしまったのだよ…。」
ヴィオーラは正直に全てを話した。
クラウスは目を閉じて聞いていた。
「…そのような人間だという事は、すでに分かっていた…。
俺が普通の人間だという事など…分かっていたんだ…！！」
クラウスは悔しさと怒りを露にする。
ゼアもリーネもクラウスに目を合わせられなかった。
だが、ヴィオーラは冷静にクラウスを見据える。

「あんたの察している通り…あんたの右手には混沌の魔石が宿っている…。
それは、カオスが作り出した世の中で一番恐ろしい物質だ。
私にも、その石がどんな効果を持つかは分からない。
ただ…恐怖の石だ…。覚えておくといい。」
ヴィオーラは、冷静を装うも、どこか声が震えていた。

「ふん…これがどんな物質であれ、乗り越えなければ話にならない。
そうだろう？」

「分かっているではないか…。
では、手を出しなさい、あと、リーネもだ。」
ヴィオーラはそう指示して、机の引き出しから何かを取り出した。

「はい…。」
リーネがクラウスの隣に立った。
そして、2人は同時に手を前に出す。

「…。」
ヴィオーラは2人の手の上に手を翳す。
クラウスの手には、炎のような燃える赤の光が。
リーネの手には、優しい流れるような緑の光が。

「あんたらの手に魔石を宿した。
なぁに、自然の神が創ったものさ。
つまり、まともな魔石って事さ。」
それでも、クラウスとリーネは首をかしげる。

「アハハ。
僕が説明するよ。

クラウス君の左手に宿ったのは、紅炎の魔石。
炎の神様が作った魔石だよ。
ある程度、火を操れるようになる。
で、リーネちゃんの右手に宿ったのは、疾風の魔石。
風の神様が作った魔石だよ。
紅炎の魔石と同じである程度、風が操れるようになるよ。」
ゼアはいつもの微笑みに戻って説明してくれた。

「ふん…。」
クラウスは踵を返し、出口を向かう。

「どこへ行く？」
ヴィオーラが訊ねる。

「外で、この力を使おうと思ってな。」

「何言ってんの。
お礼が言いにくいだけでしょ？」
リーネがくすくす微笑みながら言う。

「ば、バカ！
そんなんじゃない！！」

「ハッハッハ。
相変わらず、クラウス君は素直じゃないなぁ。」

クラウスはまた思った。
ああ～やはりここには敵しかいないのだと。

～第八話　刺客～

「ヴォルカニック・ブレイド！！」
これは、クラウスが創った必殺技である。
敵の懐まで走りこみ、通り際に切りつけ爆発させる技。
ヴィオーラの作った土人形をいとも簡単に破壊する。

「…なんだ、その技の名前は…。」
ヴィオーラが呆れながら言う。

「いちいち、人のネーミングセンスに口出しするな…。」
クラウスは、踵を返し、ヴィオーラの家に帰って行く。

「待て。」
ヴィオーラは持っている杖を前に突き出した。
すると、先端から電気が走り、クラウスに当たった。

「ぐあああああああ！」
クラウスは虚しく倒れこむ。

「あんたの修行はまで終わっていないよ。」
ヴィオーラは何から何まで謎の女性だが、ゼアの師で、この事態が起きる事を予想していたらしい。
クラウスは油断なくヴィオーラを見据えていた。

「なんだ…その技は…？」
起き上がり際、クラウスは辛うじて言う。

「戯け。勝手に技にするな。」
また、ヴィオーラの庭に閃光と叫びが木霊した。
「貴様…俺を殺す気か…。」
クラウスは立ち上がれない。
「これくらいで立ち上がれないとは…軟弱な男だね。」
ヴィオーラは吐き捨てる。
「どうやった…？
杖から電撃など…論理的にありえないはずだ…。」
クラウスは何とか立ち上がる。
「理論に関してはあんたの腐った脳みそじゃ何も計れないだろうさ。
」
「…分かったから、理屈を言え。」
クラウスは不貞腐れた。
「まぁいい、教えてやるよ。
私の宿している魔石は迅雷の魔石。
雷の神が創ったものさ。」
ヴィオーラが自分の右手の甲を見ながら言う。
「…？
それなら、普通に魔石の力を使ったのでいいのでは…？」
「戯け。」
三度目の閃光と叫びが木霊した。

「私の持っているこの杖は、先端にスパークエレメントがついている。
雷を吸収し、増幅させる力を持っているのさ。」
ヴィオーラはダウンしているクラウスを見て言う。

「なる…ほど……。
応用と…いう…わけか…。」
クラウスは今にも死にそうだった。

「あんたも、剣の力だけに頼っていてはいけないよ。
頭も使いな。
今日はお終いだ。解散。」

「…鬼か。」
ヴィオーラは地獄耳だった。

「ぐあああああああああああああ！！」

「逃がしたのか…。奴を…。」
物凄い威圧が男を襲う。
王座に座っているのは、ギヴァード・レイ。
現ガリア王国国王。

「申し訳ありません…。」
男は、前回クラウスたちと戦った、あの忍者もどきだった。

やはり、首に特徴的なバンダナをしている。

「ふん…。まぁよいわ。
すぐに奴らを殺して来い。
反乱軍に組している様だからな…。」

「承知！」
男は素早く任務に取り掛かる。

「王…。
彼は有名な人斬りですぞ。
あいつらごときに苦戦するような輩ではございませぬ。」
大臣らしき男が言う。

「ふん…。
臭うな。
調べさせろ。」

「承知しました。」
大臣は下の階に降りた。

「クズ共めが…。
さっさと混沌の魔石を手に入れればよいのだ…。
さすれば…その力はわしのものになる…ククク。」
キヴァードは怪しく笑った…。

「クラウス、朝だよ〜！」
リーネがクラウスをたたき起こす。
「…まだ、体が痺れてやがる…。」
クラウスは昨日の悪夢を思い出す。
「昨日は大変だったね…。
今日は私も修行に参加するよ。」
「…無理はするな。」
「うん！」
リーネが元気よく頷く。

「ああ〜、おはよう！
クラウス君、リーネちゃん。」
にこにこしながら、ゼアが言う。
「ゼア…。
昨日どこ行ってたんだよ…。
ていうか、朝は苦手じゃなかったのか…？」
クラウスは眠そうに言う。
「ハッハッハ。
昨日は今日の朝ご飯の買出しにね。
目覚まし時計をかけたら僕は普通に起きれるさ。」

「…。」
あんだけ用意が良かったんだから、目覚まし時計くらい持って来いよ…と思ったクラウスであった。

「さぁ、僕の手料理を食べてみてくれ！」
出されたのは、スクランンブルエッグだった。
見た目はなかなかよかった。

「ふぅん…。
　お前が作ったのか。」

「おいしそうだね！」

「まぁ、食べてみてくれ。」
ゼアがにこにこしながら言う。

クラウスとリーネはゼアの手料理を口に運ぶ。
しかし、口に入れた瞬間、電撃が走った。

「まず…」

「まず…っ！！」

「そうか、「まずまず」か。
　これからは美味しい料理を作れるように頑張るよ。」
ゼアはやる気満々だ。

なんとおめでたい奴なのだろうか…
そして、それと同時に、これからの地獄が予想された…。

「ばあさんは食べたのか？」
「いや…ヴィオーラ様はフィーネの町のコックの料理を食べてるよ。」
（ばあさん殺す…。）
クラウスは密かにそう思った。

「ばあさん見てろ…。
俺なりに考えた「ヴォルカニック・ブレイド改」だ。
土人形を出してくれ。」

「…だから、何なんだその名前は…。」
愚痴りながら、ヴィオーラは土人形を出す。
説明が遅れたが、ヴィオーラは豪地の魔石を左手に宿している。
その魔石を使って、土人形を作り出しているというわけだ。

「行くぞ！」

走り際、相手を斬りつけ、爆発させるこの技。
しかし、この後が違った。
なんと、剣が伸びている。
いや、魔石の力を剣に宿し、具現化させたのだ。

「おおおおおおおおお！！」

圧倒的なリーチの違いで土人形を斬りつける。
そして、クラウスが剣を柄に納めると同時に土人形は爆発した。
しかし、旧「ヴォルカニック・ブレイド」の比べ物にならない爆発だった。
まさにそれは、火山の噴火だった。

「魔石の使い方を分かったようだね。
上出来だよ。」
ヴィオーラが珍しくクラウスを褒めた。

「すごいねぇ。クラウス君。
僕の必殺技は比べ物にならないよ。」
ゼアはにこにこしながら言う。

「ゼアも必殺技があるのか…。
見せてくれ。」

「ゼア。やっておやり。」

「はい。分かりました。」
ヴィオーラの命令に従うゼア。
クラウスは少し不貞腐れた。

ヴィオーラは土人形を再び作り出す。

「じゃあ…行くよ。」

（なんだ、あの構えは?！）

ゼアはレイピアを胸に翳す。

そして、払うかのようにレイピアを振った。
「ソニック・ブーム！！」

「飛ぶ剣撃だと！？」
クラウスは驚愕した。
なんと、振ると同時に衝撃波が出たのだ。
そして、土人形に当たった…。

「バ、バカな…。」

「さよう。
彼は魔石の力など全く使っていない。
自分の力だけで…「斬った」のだ。」
そのヴィオーラの言葉とともに、土人形は真っ二つに切れた。

「ゼアさん…すごいんですね。」
リーネが尊敬の眼差しを見せる。

「修行したからね。」
ゼアは微笑んでいたが、眼は暗かった…。

「クラウス！
お命頂戴！！」

「なっ！？」
その言葉とともに、クラウスの首辺りに剣撃が走る。

「また会ったな。
クラウス＝コルノール。
今度こそ、貴様を倒す！！」

また、特徴的なバンダナをしている忍者もどきだった。

「くそ…むかつくな…。
いちいち忍者もどき忍者もどきって…！！」

「…誰に向かって怒っているんだこいつは…。」

「…人斬りか…。」
ヴィオーラは蚊のような声で言った。

「ここであったが百年目！
死んでもらうぜ！！」
走り際に男は抜刀した。

「なっ…！？」
クラウスは男の刀をヴォルノ・エッジで受け止めた。
「残念だったな。
…俺も修行は積んでいる。」
そう言って、男をはじき返す。

「来い。」
クラウスは、男を見据えた…。

～第九話　紅　怜真～

「へへっ。
どうした？
俺のスピードに驚いてるのか？」
「…名は。」
クラウスは静かに聞く。
「紅　怜真」
「クレナイ…レイシ…？」
「おうよ！」
「貴様、女か。」
「バカ野郎！
どっから見れば女に見えるんだ！？」
「名前…。」
レイシは通常、女が使う名前である。
「俺の出身国はジパングなんだよ！
向こうじゃ、漢字っていう文字で名前をつけるんだ！
怜真っていう名前もあっちじゃ珍しいけど、俺は男だ！」
しかも、読み方としては、怜真は「れいま」が正しい。
「なんで、ナレーションにもつっこまれなきゃいけないんだよ！？」
（ナレーション…？
なんだこいつは…。）

クラウスは密かに恐怖を覚えた。

「ああ！もういい！
さっさと死ねぇぇぇぇ！！！」
怜真が突っ込んで来た。

「おい。
こっちはゼアもばあさんも、リーネもいるんだぞ。
お前に勝ち目はないだろう。」

「なに？！」
怜真の動きが止まる。
そして、ゼア達に目を向けた。

まず、怜真はゼアを見る。
…にこにこしていた。

次にヴィオーラを見た。
…おばさんだった。

そして、リーネを見た。
…タイプだった。

「ハッハッハ！
一人はニコニコしてて弱そうだし、もう一人はおばさんで、さらにもう一人は俺のタイプだ？！
笑わせるな…」
そういい終わる前にヴィオーラによる電撃が走った。

「ぎょえええええええええ！？」

叫び声と共に、怜真は空高く飛んでいった。

「お疲れ様、クラウス君。」
ゼアがにこにこしながら言う。

「俺は何もしていない。
結局、ばあさんがブッ飛ばしたからな。」

「人のことをばあさん呼ばわりするとは…
どう見ても、２０代前半じゃろうが。」

「どう見ても、６０後半じゃ…。」

「戯け。」
また、閃光とクラウスの叫びが木霊した…。

「…さっさとここを出て…カオスを倒さなければ…。」
クラウスは、暗くなった外を見ながらつぶやいた。

「！？」
次の瞬間、クラウスの目の前に、何かがすごい速さで通り過ぎていった。

「誰だ！？」
クラウスは外を見たが誰もいなかった。
そして、クラウスは１８０度首を回転させた。

「…矢文…？」
ドアに刺さった矢に、紙が括り付けられていた。

『森の奥の湖の辺に来い。
決着を望む。』
それだけ書いてあった。

「ふん…行ってやるか。」
机に置いてあるヴォルノ・エッジを携えて、クラウスは指定の場所に向かう。

「ヴィオーラ様…クラウス君が…」
ゼアが言う。

「…やはり…か…。」
ヴィオーラは静かに言った。

「追わなくていいのですか？」

「なぁに。
あいつはそれなりにタフな奴だ。
それに…ここも直に狙われる。
私はここを守らねばならん。」
ヴィオーラは何か、決意に満ちた表情で言う。

「な…？！
なら、僕はここに…！」
いつものゼアらしからぬ表情だった。

「戯け。
私は大丈夫だよ。
クラウスを助けてやりな…。」

「し…しかし！」

「今は、老い耄れの心配より、若造の心配をしてやりな。
それに、あいつが死んだら、悲しむ奴もいるんじゃないかい？」
ヴィオーラは少し微笑んで言った。

ゼアは少し考えた後、こう言った。
「ヴィオーラ様…
今までありがとうございました…。
クラウス君は…必ず僕が守ります。」
そう言って、ゼアは森の奥へ消えていった…。

「ふん…。
もう察するとは、勘だけはいい奴だ…。
…ゼア、頼んだぞ。」
そして、ヴィオーラは外を見上げた。

「よく来たな、小僧。

怖くて逃げたとばかり思ってたぜ。」
怜真は木の枝の上に立っていた。
「ふん…。
それはこっちの台詞だ。」
クラウスは怜真を見上げて言う。
「口だけは達者だな。」
そう言って、怜真は木の枝から降りてきた。
「口だけかどうか…試してみるか？」
「面白ぇ…。
やってみやがれ！」
怜真が飛び掛る。
クラウスは剣を×にして、防ごうとした。
しかし、何の手応えもなかった。
「バカな奴だ。正直に正面から攻撃するわけねぇだろ！！」
後ろから声が聞こえた。
次の瞬間、背中が何かが刺さる感覚に襲われた。
だが、あるはずの痛みが全く感じられなかった…。
「…お前は一体なんだ…。
血は流れないし、その表情じゃ、痛みは感じないときてる…。」
怜真は刀を抜きながら、言う。
「多分…、俺がカオスに選ばれし、人間だからだろう。
昔からそうだった。

血も、痛みも、涙も、味も…すべてないんだ…。」
「なん…だと？」
怜真は思わずあとづさる。
「俺は…何も感じない…なにも…。」
涙を出したいのに、全く出てこなかった。
血も出したいのに、全く出てこなかった。
今まで、カイルが帰ってこなかった事があった。
リーネは泣いていた。
俺も泣きたかった。
なのに…一滴も涙は出なかった。
『クラウスは…泣かないの？』
『俺は…泣けないんだ…。
なぜか…涙が出ないんだ…！！』
『じゃあ…私がクラウスの分も泣いてあげる…。』
「…俺は…「人」ではないのかもしれない…。」
「…やめだ。」
怜真は言った。
「何…？」
クラウスはいっている意味が分からなかった。
「俺は…正義のために戦っている。

誰もが安心して暮らせるような世界がほしいんだ…。」
怜真は夜空を見上げながら言う。

「ふん…。
表向きじゃあ、あの王が正義さ…。
だが、俺は自分を正義だと信じている。」

「…俺が間違ってたぜ。」

「ふん…。
その間抜けなバンダナも間違ってるぞ。」

「余計なお世話だ！！」

「…お前はどうするつもりだ。
俺を殺さないと、王に殺されるのではないか？」

「本当だよ！
どうしよう！」
急に怜真はオロオロしだす。

「…阿呆が…。」
クラウスは呆れ顔を見せる。

「…来たか。」
ヴィオーラが静かに言った。

「久しぶりだな…。
ヴィオーラ…。」
黒髪で冷たい印象を持つ男が言った。
腰には銃を携えていた。

「あんたも怪物みたいな男だよ…。
あの王に仕えるほど腐っちまったのかい…。」

「…流れに従っただけだ。」
男は冷たい目でヴィオーラを見据える。

「そうかい…。
ならば、私があんたを止めてみせる！」
ヴィオーラは杖を構える。

「愚かだな…。」
男も腰に携えた銃を抜く。

森に大きな閃光が走った…。

「クラウス君！！」
「クラウス！」

ゼアとリーネはやっとの思いで湖の辺に着いた。
「ゼア…。リーネ…。
やはり分かっていたんだな。
あのばあさん。」
クラウスはしわがれた老婆の顔を思い出す。
「おお。
ニコニコ君。」
怜真がゼアに言った。
「ニコニコ君って…。
クラウス君！
早く離れて！」
ゼアが叫ぶ。
「いや…こいつ、俺たちの仲間になるらしいぜ。」
クラウスが言う。
「…は？」
ゼアは口をあんぐりさせる。
「まだ、信じてもらえないと思うけどよ、よろしく頼むぜ！」
怜真がニカッっとして言う。
「…うわぁ。
クラウス、怜真さんを仲間にしちゃったんだ！」
リーネはいかにもすごぉいというような顔をする。
「全く…さっさとクラウスも自分が正義だって教えてくれりゃいい

のによ。」
怜真が不貞腐れて言う。
「それくらい分かれ、単純野郎。」
クラウスが挑発気味に言う。
「んだとこの…」
そういい終わる前に、ヴィオーラの家の方角から、閃光と爆発音が…。
「なんだ！？」
「まさか…ばあさん！」
クラウスは、この予想は当たらないでくれと願うばかりだった…。

～第十話　無機質の人～
「ばあさん！」
クラウスの見たものは、顔の左半分を仮面で隠した黒髪の男と血みどろになったヴィオーラだった…。
「貴様…！！」
クラウスが目を引き攣らせた。
「貴様がクラウスか。

ヴィオーラの敵をとりたければ、王都まで来るんだな。」
男はそう言って、静かに消えた…。

「待て！！」
クラウスは男のいた場所に走ったが何もなかった…。

「ヴィオーラ様…。」
ゼアはヴィオーラを抱き上げ言った。

「ヴィオーラさん…。」
リーネは、顔を覆うしかなかった…。

「そんな悲しい目をするな…。
こうなる事も予想済みだったさ…。」
ヴィオーラは何も悔いているようにも、悲しんでいるようにも見えなかった…。

「クラウス…。
奴を倒そうとは思うな…。
奴は…化け物だ…。」
何かに怯える様にヴィオーラは言った…。

「だが、奴をのさばらすのは性に合わん…！！」
クラウスは悔しそうに言う。

「クラウス…。
覚えているだろう…。
お前には、隠された力がある…。
だが、それと同時に何かを失う…。
望むなら…使わずに済めば…いいのだが…。」

ヴィオーラは夜空を見上げていった…。

「ヴィオーラ様…。
最後にお聞かせください…。
なぜ、僕を匿ったのか…を。」
ゼアは涙を堪えながら言った。

「ふふ…。
お前の目が…澄んでいたからさ…。」

「！！」
ゼアは、はっとした。
希望に満ち溢れたかのように…。

「ならば…父上は…！！」

「ああ…。
もしかしたら…お前の頑張りで何とかなるよ。」
ヴィオーラは笑顔でそう言った…。

「何言ってんだよ、ゼア！
早く医者に…。」

「いいんだよ、クラウス…。
私も、人間の道から外れてしまったんだ…。
これで…楽になれ…るな…ら……。」
ヴィオーラは全てを言い終わる前に息絶えた…。

「ばあさん…。」
クラウスは涙に暮れたかった。

自分の恩人でもあるこの人のために…。
「クラウス君…。
ヴィオーラ様を弔ったら…王都に向かう…。
それでいいね？」
「ああ…。」
ゼアは平静を装っていたが、やはり声が震えていた…。
そして、頬には何か光るものが見えた…。

ゼアは誰の手も借りず、一人でヴィオーラを弔った…。
それに、何の意味があるのか、それは誰にも分からなかった…。
「よぉ、まだ祈ってんのか…。」
怜真がゼアの隣に座り込んだ。
「怜真君か…。
そうだね。この祈りで、ヴィオーラ様の魂が報われるなら…。」
ゼアが悲しそうな微笑を見せる。
「あんたも、大変だな…。
一番慕ってた人間が死んじまうんだからな…。」
怜真は同情の意味を込めて言った。
「でも…これは分かっていた事だったから…。」

「…？」
バカな怜真は全く意味が分からなかった…。
（余計なお世話だ！！）

「怜真君…。
これから起こる戦いは、並大抵のものではない。
何の関係もない君を巻き込みたくはない…。」

「馬鹿野郎。
俺だって、クラウスを殺しかけちまったんだ。
責任は取るつもりだぜ…。」

「言っても聞かないみたいだね…。
でも、君は死ぬかもしれない…。
彼のために死ねるというのかい？」

「ジパングじゃあ、俺も立派な人斬りだからな。
こんな人生が終われるなら、どんな死に方だっていいぜ…。」

「そうか…。」

しばらく沈黙が続いた。

「あんたも…俺のこと信じねぇだろうな…。
一度でも敵側に立っちまったんだ。
言い訳もするつもりはねぇ。」
怜真は強い目でゼアを見た。

「僕も、クラウス君も、リーネちゃんも…お人好しだから、信じて

るよ。
　それに、最初君に会った時も、悪い奴には見えなかったからね。」
微笑みながらゼアは言った。
「お前ら…そんな事じゃ、すぐやられるぞ…。」
怜真が呆れ顔になる。

「ハッハッハ。
　でもね、僕らはそれにも負けない力があるんだと僕は思うんだ。」
ゼアはにっこりして言った。

「それは俺がいるからだろう？」
怜真はにやりとして言った。

「いや、それは無い。」
ゼアはニコニコして言った。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！？
　そこは認めるところだろう！」
怜真が立ち上がり、叫ぶ。

「僕は嘘つかない。」
ゼアはやはりにこにこして言う。

「バシュゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ」
異音と共に怜真はどこかに飛んでいった。

「怜真君はリアクション豊富ですね…。
　ヴィオーラ様…。」
それを最後に、ゼアはヴィオーラの住んでいた家に戻った…。

クラウスはバンダナを締め、気合を入れる。
「…よし、行くぞ…！！」
「うん…！がんばろうね！」
「僕の力が続く限り…。」
「へへっ。
暴れてやるぜ！！」
個々で準備を済ませ、外に出た一行。
「ゼア、港に着くまでに、何か障害はあるか？」
クラウスがゼアに聞いた。
「ひとつ…ある。
蒼鱗の洞窟だよ。
名前の由来は岩肌が青く光っているから名付けられたんだ。」
ゼアは聞いてもいないのに説明する。
「そうか…そこにも魔物が潜んでいる可能性があるな…。」
クラウスはゼアの説明を無視して言った。
「魔物は俺に任せな。
パパっと片付けてやるぜ！」

怜真が左手の拳で右手の掌を殴って言った。

「いや、お前は当てにならん。
そこら辺で素振りでもしてろ。」
クラウスが冷たく怜真に言う。

「すすすす、素振りぃ？」

「まぁ、頑張る事だ、怜真君。」
ゼアが怜真の肩をポンと叩く。

「…。」
怜真はひどく落ち込んだらしい。

「クラウス…。
もう、混沌の魔石は使っちゃだめだからね…。」
リーネが心配そうにクラウスに言う。

「ああ、分かってるさ。」
クラウスは笑みを見せた。
リーネも微笑を返す。

「まぁ、なんだ。
俺の実力は隠しておくもんじゃないぜ…。
判ったかクラウス。」

「気安く呼ぶな。」

「ズーン…。」

「まぁ、頑張る事だ、怜真君。」
ゼアは今度は怜真に二回、ポンポンと肩をたたいた。
「俺…ここに来なかったらよかったな…。」
「なら帰れ。」
クラウスの冷たい即答に怜真の心は砕け散ったらしい…。
「よし、いらないやつは置いていく。行くぞ。」
「よぉし、行こう行こう！」
リーネは少し怜真を心配するもののクラウスに従った。
「まぁ、クラウス君はいつもあんな感じだよ。
ついていけないのなら、ジパングに帰りなさい。」
ゼアがにこにこして言う。
「いや…ここで沈む俺じゃねぇ…。
絶対…ついていってやるぜ…！！」
怜真は、カオスを倒すよりも大変な目標を作ってしまったのかもしれない…。

「ここが…蒼鱗の洞窟…。」
入り口は、人一人がやっとすっぽり入るくらいの大きさだった。
奥は、暗いのかと思いきや、蒼く光る岩肌で幻想的な雰囲気を醸し

出していた。
「なんか綺麗だねぇ…。」
リーネがうっとりして言う。
「気をつけたほうがいい。
奥のほうから剥き出しの殺気が出ている…。」
顰め面をしてゼアが言った。
「おーし、腕が鳴るぜ！」
「貴様の腕など折れていればいい。」
クラウスが怜真に見向きもせずに言った。
「ズーン…。」
「まぁまぁ。気にしない事だ。」
ゼアが怜真の肩をポンポンと叩いた。
「行くぞ。」
クラウスがヴォルノ・エッジを鞘から出して言った。
リーネがクラウスの後についていく。
ゼアは怜真の肩をポンポン叩いて慰めながら歩き出す。
「人間の手は全くと言っていいほど出てないな…。」
クラウス岩肌に触れながら言う。
「本当…。
こんなに綺麗なのに…不思議だね…。」

「それは、ここの洞窟に言い伝えがあるからさ。」
ゼアが前に進み出る。
「人間は、そういうの信じないんじゃないか？」
「それはお前だけだろう。」
クラウスはやはり怜真に見向きもせずに言う。
そして、ゼアがまたいつもの慰めにかかる。
「確かに、強欲な人間もいた。
だが、何か仕出かす前に何者かが潰すから、誰もこの岩肌に触れられなかったんだ。」
「俺、触れてるぞ。」
クラウスが岩肌をポンポンと叩きながらゼアに言った。
「きっと、邪悪な気を持ってないからだよ。」
にこにこしてゼアが言った。
「いや…俺、普通に混沌の魔石つけてるぞ。」
クラウスがゼアに混沌の魔石を見せつける。
「心だろうね、見るのは。」
「だそうだ、気をつけろ、レイ。」
クラウスがまた怜真に冷たい言葉をかける。
ゼアはまた慰めにかかる。
この洞窟は氷属性の魔物が多かった。
仲間の足や手が凍らされるその度に、クラウスの紅炎の魔石が役に

立った。
「ぐっ…！
クラウス、魔石で頼む！」
怜真は魔物に足を凍らせられたようだ。
「気安く呼ぶな。
それに、今のお前にはそれがちょうどいいだろう。
自然に溶けるのを待っていろ。」
そう言って、先に進むクラウス。
「…ええ？えええええ？！」

「クラウス、怜真さんは？」
「死んだ。」
「ええ！？」
「嘘だ。」
真顔でクラウスは嘘を言った。
リーネは心臓が止まりそうだった。
「まぁ…彼のことだ。
大丈夫だろう。」

ゼアがにこにこして言う。

「は！」
氷属性の相手には、ヴォルノ・エッジの効果が倍増した。
理には、相性というものがあって、氷は炎に弱いというのは、魔物と魔石の間にも、もちろんある。

「今回は本当にクラウス君が頼もしいね。」

「本当。大活躍だね！」

「ただ、相性が良かっただけだ。
騒ぐことじゃない。」

「クラウス君。
ここにはボス級の魔物はいないようだ。
小さい気ばかりだし、それに、魔物の行動も皆バラバラだ。」

「そうか、なら楽に攻略できるな。」

次々と襲ってくる魔物を切倒し、先に進む一行。
「ほとんど一本道だな。」
「そうだね…。」
「…！！
クラウス君、リーネちゃん…！
これは…！！」
ゼアが何かを見て驚愕していた。
クラウスもゼアの見ている方向を向いた。
「…！！！」
それは、人でも魔物でもなかった。
巨大な「物」だった…。
「なんだこれは…！！」
「人型の…機械か…。」
「機械…？
では、動くということか…！」
「何もしなければ、動くこともないだろう。
早くこの場を…。」
そういい終わる前に上の方からなぜか怜真の声が聞こえた。
「なんだ、これ？
全然うごかねぇし…置物か？」
ガンガンと拳で巨大な人型の機械の顔の部分を殴りながら怜真が言った。

「ファイア！」
クラウスがこめかみに血管を浮かばせながら、怜真に火の玉を発した。

「アッチィィィィィ！！」
怜真機械の肩でピョンピョン飛び跳ねる。
そして、ピョンピョン跳ねるうちに足を滑らせた。

「ブ！！」
見事に顔面を強打した。

「何をしている！
こいつがどんな力を隠せているのかもわからんというのに！！」
クラウスは完全に切れていた。

「す、すいませ…ギャアアアアアアアアアアアアア！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」
怜真の悲鳴とは別の叫びが聞こえた。

「な…？！」
クラウスはボコ殴りの刑を終了し、身構える。
しかし、怜真は失神していた。

「な、何？この声…！」
その、声とも音ともいえぬ叫びは次の瞬間止んだ。
そして、なんと巨人の足がどんどん上に持ち上がっていく…。

「クラウス君！

ここを離れるんだ！」

「判った！」
クラウスは怜真を担いで走り出す。
そして、巨人は持ち上げた足を前に突き出し、地面に下ろす。
人間にとっては、普通の動作だが、この巨人が行う場合、地面が割れんばかりに揺れる。
踏み潰されたら、ただでは済まないだろう。

「ちっ、お前のせいだぞ！
レイ！」
だが、怜真は三途の川を見ているような表情だった。

「クラウス君！
僕らは完全に敵視されたようだ！
早くここから逃げるしか…！！」
しかし、次の瞬間、巨人の腕が大きく動き、天井を壊した。

「な！？こいつ、道を…！」
崩れた岩が積もって、進むべき道が途絶えてしまった…。

「意思を持っているってことなの？！」
リーネは驚愕して言った。
「こいつはきついな…。
意思があるってことは、戻っても追いかけてくるってことか…。」

「町に被害を与えるわけにもいかないね…。
ここで倒すしかない…！」
ゼアがレイピアを抜く。

「行くぞ…！」
クラウスは少し不安を覚えるも、身構えた…。

～第三章　封印されし少女～

～第十一話　封印されし少女～

「くっ！」

巨人の振り下ろす拳をジャンプで避けるクラウス。

「ヴォルカニック・ブレイド！」

あまりに大きく、あまりに重いため、巨人の動作は遅い。

だが、それを補うような防御力があった。

「ぐぁ！」

技は命中している。

だが、その無機質な体は全てをはね返した。

そして、虫を振り払うかのように平手打ちをしてくる。

「クラウス君！

リーネちゃん、矢で援護を頼む！」

「は、はい！」

リーネは戸惑いながらも返事をする。

「レイントラスト！」

「ブラストアロー！」

ゼアは雨のような突きを巨人に浴びせる。

そして、リーネは風の力を矢に込めて渾身の一撃を放つ。

しかし、巨人は全く動じていなかった。

「くっ…不死身なのか…？」

ゼアが歯を食いしばる。
「痛ってぇ…」
怜真が目を覚ました。
「レイ！早くそこから離れろ！！」
「なに？」
だが、巨人の拳は怜真のすぐそこにきていた。
そして、物凄い衝撃が走った。
「レイ！」
「怜真さん！」
「怜真君！」
三人は同時に叫ぶ。
だが…
「喚くなよ。
俺はここにいるぜ。」
怜真はいつのまにか、巨人の肩に乗っていた。
「ふん…。
スピードだけは天下一だな…。」
クラウスはため息を吐き、言った。
「よっしゃ！
こんな人形は瞬殺だぜ！！」
怜真は刀を鞘から抜き、斬りかかる。

「あ。」
しかし、刀は巨人の頭部分に当たった瞬間に折れた。
「ブ！」
巨人は怜真を摘み上げ、地面に叩きつける。
「くそ…。
どうすることもできないのかよ…！」
クラウスが悔しそうに言う。
「クラウス君！
この巨人は何かを守っている！」
ゼアが何かを見つけたようだ。
「なんだと！？」
「さっきから、この巨人は何かを守るかのような動きしかしていない！
現に、巨人の後ろには扉がある！」
確かに、巨人の後ろに扉があった…。
唯一、人の手が加えられた扉…。
いったい何が…。
「しかし…あそこに入るには誰かが囮にならなければ…。」
「囮か…。」
皆が怜真を見た…。
「え？なんで？！」

「行ってこい。」

「はい…。」

怜真はクラウスに逆らえなかった…。

「…。」

怜真は巨人の前に立つ。

「お前の父ちゃん…機械オタクかよ！！！！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

巨人が唸りを上げる。

「え！？え！？

お前言葉なんてわからんだろ！？

そしてなんで怒ってんのぉぉぉぉ？！」

怜真がダッシュで逃げる。

そして、それを追いかける巨人。

「…明らかに変な状況だが、これで道は開けた。

リーネ、ゼア！行くぞ！」

「ちょ…、怜真さんは！？」

リーネが慌てて聞く。

「あいつは死なん！」

「えええええええええええええええ！？

死にます！死にますよ！」

「行くぞ。」
「無視！？」
怜真を無視して三人は扉に入る…。
「…！！」
クラウス達は言葉を失った。
地面から突き出ている沢山の結晶…。
その中でとびぬけて大きい中央の結晶の中に長い髪を垂らした少女が眠っていた…。

～第十二話　隠された力～
「…少女？」
長い髪で服装はなにやら、魔法使いが着そうな、今の時代は考えられないものだった。
「全てが理不尽だな…。
　結晶の中に女の子とは…。」
ゼアが考えながら呟く。
「それにしても可愛いよなぁ…。」
いつの間にか怜真が中心よりも右寄りの結晶の上に座っていた。
「殺されたくなければ、今すぐ降りろ。」

こめかみに血管を浮き上がらせながら、クラウスが怜真に指示する。
「んん？
お前リーネちゃんという彼女がいながらこの子に惚れたのか？」
怜真がにやりとして言う。
次の瞬間、クラウスが物凄いスピードで怜真に突進した。
「ぎぃぃぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」
ただただ、怜真の叫び声だけが聞こえた…。
「怜真君！
あの巨人をいったいどうやって撒いたんだい？」
ゼアが今にも死にそうな怜真に言う。
「ハァ…ハァ…俺のスピードが凄ぇのは、お前も知ってるだろう…。
だから…とりあえず…逃げた…」
「…は？」
「貴様…あの巨人がここに来たらどうするつもりだ！！」
そしてまた、怜真の絶叫が木霊した…。
「…ん？」
ボコ殴りの刑執行中にクラウスの右手に宿る混沌の魔石が光りだす…。
それに共鳴する様に結晶も次々と光りだした…。
「な…なんだというんだ…？！」
困惑するクラウスたちを他所に、点滅を繰り返す魔石と結晶…。
そして次の瞬間、目の眩む様な強い光が放たれた…。

「くっ…！」

「クラウス…！」

「クラウス君…！！」

そして、その光が消えたと思えば、なんと今まであった結晶がすべて消えていた…。

そして、中に入っていた少女は抵抗もなく落ちていく…。

「ゼア、頼む！」

クラウスが叫んだ。

「分かった！」

ゼアはそれに応答し、少女の落下点で構える。

「なっ…！」

しかし、少女は落ちてこなかった。

何者かが、物凄いスピードで少女をさらったのだ。

「危ねぇな…。ニコニコ君よ。

こいつの体温はマイナスを遥かに超えてるんだぜ…。

触った瞬間、ショック死がオチよ…。」

怜真が少女を抱えて着地して言った。

「なんだと…？」

クラウスが目を見張る。

「本当…。

近づいただけでどれだけ冷たいかわかる…。」

リーネはあまりの冷気に身を震わせる。
「怜真君！？
　でも、君の腕は…。」
ゼアは驚愕した。
怜真の腕を水の衣が包んでいた…。

「流泉の魔石。
　水の神が創り出した代物よ。」
怜真はにやりとして言った。

「カッコつけるな。」
クラウスはその言葉と共に怜真の後頭部に飛び蹴りを入れる。

「ぐお！！」
怜真は倒れた。

「クラウス君。
　魔石でこの子を暖めてやるんだ。」
ゼアが怜真をあからさまに無視して言った。

「判った。」

「…ここは…。」

「気がついたか。」
クラウスが魔石による温度供給を終了する。
「君は何故かここで封印されていたんだよ。
まずは君の名前を教えてくれないか？」
ゼアが優しい笑みを見せて言った。
「私は…メイ…。」
メイは困惑しながらも、自分の名前を言った。
「メイちゃんかぁ。
可愛いねぇ、今度俺とお茶しな…」
「変なバンダナ。」
その言葉に、怜真は今までの言葉の中で一番ショックを受けたという…。
「まぁ、しょうがないさ…。」
そして、ゼアが慰めにかかる…。
「ところで、お前はなぜここに封印されていたか分かるか？」
「分からない…。
私は…封印されていたの…？」
「ああ、お前の素性は知りたいが、とりあえず、ここから出るぞ。」
クラウスは立ち上がりかけたが、衝撃によりそれはできなかった…。
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」
巨人が壁を打ち破り、侵入してきた。

「くそ！どうすれば…！！」
クラウスはヴォルノ・エッジを構える…。

「止まって…ゴーレム…。」
メイは何かに操られたかのように言った。
そして、その命令どおり、巨人は止まった…。

「…？！
どう…やったんだ？」
クラウスは困惑を隠せない。

「自然に声が出て…何故だかわからないけど。」
メイがにこりともせず言う。

「だが…道は絶たれた…。
王都まで行く道はここしかない…。」
ゼアが悔しがりながら言う。

「王都まで行くの？」
メイがおもむろに聞く。

「ああ…
だが…これでもう終わりだ…。」
クラウスが地面にこぶしを叩きつけ、言った。

「王都まで…行けるよ。」

「え？」

『テレポート！』
クラウス達の体が持ち上がったかと思うと、いきなり景色が途絶えた。
そして、次の瞬間、クラウス達は王都のすぐそばにいた…。
「なっ…！！」
「ここは…！？」
「あれは…王都！？」
「ところでメイちゃん、せっかく王都まで来たんだから
お茶しない？」
「…いや。」
ひょんな事から一気に王都に辿り着いた一行…。
謎の少女メイも加わり、物語は中盤を迎える…。

～第十三話　ゼアについて～
「ゼア様！
お帰りなさいませ！」
門番がビシッと敬礼して言う。
「お疲れです。」

ゼアが笑顔で返す。
「お前って貴族かなんかか？」
怜真がゼアに疑問を投げかける。
「いやぁ、まぁ、そんな感じ…。」
アハハと微笑みながらゼアは言う。
「…？」
怜真は、ゼアの謎の言動を理解できなかった。
そして、門番によって門が開かれた。
王都に入った後も、ゼアが通っただけでどよめいた。
「あら、ゼア様。
おかえりなさいませ。」
貴族の令嬢がゼアに近づいてきた。
「ああ、ただいま。」
ゼアが微笑んで返す。
「外は魔物で物騒でしょう？
さぞ大変だったでしょうね…。」
令嬢はゼアを心配するような目で言う。
「ああ、仲間のおかげで何とか乗り切ったよ。」
ゼアはクラウス達を見ながら言う。
「あらあら、服装から見ると、どこかの村からいらしたのね？
道中さぞ大変だったでしょう？

私にできることがあればいつでも言ってくださいね？」

「は、はぁ…。
ありがとうございます…。」
クラウスが戸惑いながらも言う。

「では、ゼア様。
またお会いしましょうね。」
令嬢はそう言って、また買い物に出かけていった。

「貴族って…威張っているイメージがあった。
きっと、子汚い村の子汚い子供って言われるものかと思ってた。」
クラウスが本音を吐く。

「ハッハッハ。
まぁ、中には誇り高い貴族もいるよ。
でも、彼女は平等を望んでいるんだ。
だから、僕も好意を持って話し掛けられたわけさ。」

「貴族って…よく分からん。」

城下町を抜けて、城の門の前まで来た一行。
「でかいな…。」
クラウスが感想を漏らす。

「本当…。おっきいねぇ…。」
リーネも城の上のほうを見ながら言う。
「メイちゃん。大きいねぇ。
俺らもいつかはこんなところに住みたいね。」
「レイとは…住みたくない。」
そして、いつものゼアによる慰めが始まる…。
「ゼア様…。」
城の門番が徐に口を開く。
「ん。なんだいケイン。」
ゼアはその門番の名前で呼んだ。
「王から…ゼア様を抹殺せよとのご命令があったのです…。」
「そうかぁ…。
で？」
微笑みながらゼアは言う。
「で？って…！！」
「ケインは、僕を殺す気かい？」
「い、いえ…。
できれば、そんなことはしたくない…。
お逃げください！
そうすれば…！！」

「ケイン、耳を貸してくれ。」
ゼアがケインに近づきながら言う。
「は、はぁ…。」
ゼアはクラウス達には聞こえない声でケインに耳打ちする。
「そ、それは本当ですか！？」
途端にケインは希望に満ちた顔になる。
「ああ、本当だよ。
悪いけど、城中の兵士にこの事を伝えてくれないか？」
「は、はい！
承りました！」
慌ててケインは城の門を開ける。
「ですが…王は何かを企んでいるようです…。
会見の際はお気をつけて…。」
そう言ってケインは、走って他の兵士に話を伝えにいった。
「何言ったんだよ。」
クラウスが不貞腐れながら言う。
「秘密の魔法さ。」
ゼアは、白く光る歯を見せながら笑って答えた。
「メイちゃん、これから何があっても君を守るから安心してね。」
怜真もまけじと白い歯を見せながら言う。
「私…別にレイの力無しでも大丈夫だから。

それに、あんまり当てになりそうにない…。」
そして、ゼアは慌てて怜真の慰めに入る。

階段を上り、二階の王の間に辿り着いた一行。
「ふん…急に抜け出したと思えば、のこのこ帰ってきおって、馬鹿息子が。」
キヴァードが威厳たっぷりに言う。

「申し訳ありません…。
父上…。」
クラウス達は目を丸くする。
あのゼアが、キヴァード・レイの息子だったのだ。

「お前のような奴にはもう飽きたわ。
これから親子の縁は切る。
分かったな。」
ものすごい威圧で、ゼアに言うキヴァード。

「どういう…事ですか！？
もう、父上の跡取はいなくなるという事ですよ！？」
ゼアが目を見開いて言う。

「私を父と呼ぶな。
跡取のことなら、もうすでに考えておるわ。
入れ。」

「はい。」
キヴァードの命令に答えたのは、美麗な女性だった。
王の間の隅のほうに身を寄せていて、誰も気づかなかった。

「新しい跡取の、ミリアンヌ嬢だ。」

「久しぶりね。ゼア・レイ。
私が新しい跡取になることになったの。」
不敵な笑みを見せるミリアンヌ。
美麗な顔が醜く歪んだ。

「ミリア…！！
なぜ…！！」
ゼアは今までで一番驚愕した顔をする。
クラウス達は話の流れに全くついていけなかった。

「こやつらを牢にぶち込んでおけ。」

「はっ！」
キヴァードの命令に側近の兵士が応答した。

「父上…！！
なぜこのようなことを…！！！」
兵士に体を取り押さえられながら、ゼアは叫ぶ。
しかし、キヴァードは聞く耳を持っていなかった…。

「父上、父上ーーーーーーーー！！！！」
最後の叫びにも、キヴァードは答えなかった…。

「で、どういうことなんだ…？」
クラウスが徐に口を開く。

「すまない…。」
ゼアは謝る事しかできなかった。

「そんなに…俺らのこと、信じられないかよ…！！！」
ゼアの胸倉を掴み、クラウスが叫ぶ。
ゼアが憎い訳じゃない…。
ゼアに信じてもらえなかった、自分が憎かった…。

「俺も…納得いかねぇぜ…！
俺はジパングじゃあ、名の知れた人斬りだ…。
俺は言ったのに、何でお前は言わないんだよ…！！」
急に怜真が立ち上がり言った。

「クラウス君が…父上をひどく嫌っていたから…
教えたら…殺されると思ったんだ…。」
ゼアにいつもの笑みはなかった…。

「クラウス！それ以上、ゼアさんを責めないで！
ゼアさんは悪くないよ…！」
リーネが必死にクラウスに言う。

「じゃあ…一体、誰が悪いんだよ…！」

「…。」
リーネは何も言えなかった…。
「僕が悪いんだ…。
いつ死んでも悔いはない…。
…好きにしてくれ…。」
ゼアが静かに言った。
しかし、言い終わった瞬間、右頬に衝撃が走った。
目の前には、クラウスが立っていた…。
「甘えてんじゃない…！！
お前はキヴァードという父がいることで、自分に責任を無理矢理負わせてるだけだ…！！
少なくとも俺は…お前はお前で、あいつはあいつだと思っている…！！
お前が責任を感じることなんて何もないんだ…！！」
「そうだよ！自分とお父さんを照らし合わせちゃだめだよ！」
「お前は、あいつとはぜんぜん違うじゃねぇか。
俺も…お前を信じてるぜ。」
怜真は少し微笑んで言った。
「かっこつけんな。」
クラウスはボコ殴りの刑を開始する。
「私も…みんないい人だと思うから…。」
メイも静かにそう言った。

「ありがとう…皆。」
ゼアにいつもの笑みが戻った…。
「ところで…あの女の人…誰なんですか？」
リーネが引っかかっていたことを言う。
「彼女はミリアンヌ…。
　僕の幼馴染だ…。」
「幼馴染だと？」
クラウスが刑を一時停止する。
「彼女は…王子である僕に、気さくに話し掛けてくれた、唯一の人なんだ…。
　皆、王子、王子と…実際嫌だった時にね。」
ゼアが昔を思い出しながら言う。
「じゃあ、なんでそいつが跡取に…。」
「分からない…。
　父上は僕に後を継がせたくないだろうとは分かっていたが…まさかこんな方法で…。」
「ミリアンヌさんとゼアさんって仲良しなんでしょ？
　なんでミリアンヌさんそんなことを…。」
「…。」
ゼアは信じたくない気持ちだった。
あんなに優しかったミリアンヌが…。
しかし、次の瞬間、壁から球体がものすごいスピードで突き抜けて

きた。
その勢いは牢屋のドアをも壊すほどだった。
「大砲の玉！？」
「来たようだね…。
反乱軍…いや、義栄軍が…！」
ゼアは不敵な笑みを見せた…。

～第十四話　義栄軍～
「は、反乱軍だ！！
反乱軍が攻めてきたぞー！！」
兵士の声が聞こえた。
「反乱軍ってなんなんだ？」
クラウスがゼアに聞いた。
「対ガリア国の組織だ。
最終目的は、世界の統一。
父上から見放された村や町出身の人が多いよ。」
「なるほどね。
一揆みたいなものってことか。」
怜真が納得したように言う。

「とにかく、早く出たほうがいい。
反乱軍と合流するんだ。」
さっきの大砲の玉で壊れたドアをこじ開け、進もうと思った瞬間、
何者かが近づいてくる気配がした。

「牢屋なんて行かなくてもいいような気がするんだがなぁ…。」

「何言ってんだよ。
イヴァ様の命令だろうが。」

「まぁなぁ…。」

「おいおい…
兵士なのか？反乱軍なのか？」
怜真がゼアに聞いた。

「恐らく…反乱軍だろう…。
だが…。」

「お、まだ人がいるぜ！」

「よっしゃ！いっちょここで成果上げるか！！」

「ちっ…。
反乱軍と戦うことになろうとはな。」
クラウスがヴォルノ・エッジを鞘から抜く。

「俺たちは反乱軍じゃねぇ！！
義栄軍だ！！」

そう言って、反乱軍の兵士は大剣を振り下ろす。
だが、瞬時にクラウス達は避けた。

「そんなでっかいもの持ってちゃ、俺の攻撃はかわせないぜ。」
クラウスはそう言って、ヴォルノ・エッジの柄を相手の後頭部に当てる。

「くそっ！！
今度は俺が相手だ！！」
二人目の反乱軍の兵士は銃を持っていた。

「これがあれば、お前ら剣士は不利だぜ…？
さぁ、どうするよ？」
だが、何か風のようなものが兵士の横にくる。
怜真だった。

「スピードがありゃぁ…銃なんて屁だぜ。」

「う、うわぁぁぁぁぁぁ！！」
兵士は銃を捨て、そう叫んで逃げていった。

「ちっ、軟弱な野郎だぜ。」

「とにかく、僕は反乱軍の統一者と面識があるんだ。
それまでは耐えよう。」

「つまり、大将さんに会わなきゃ、戦い詰ってことか。」

「なるべく早く会わなくては…。」

城の兵士とも、反乱軍の兵士とも戦いながら、
統一者に会わんとする一行。

「ちっ、戦わなくていい相手を相手にするとはな…」
クラウスが一振りで二人の兵士を斬りながら言った。

「あまり、力を入れすぎないでくれよ。
特に反乱軍相手にはね。」
ニコニコしながら急所をはずして兵士を突くゼア。

「風の魔石よ…
ウィンド！！」
リーネがそう唱えると、突風が兵士達を襲う。

「なるほど…相手を吹き飛ばすことで殺傷させることはない…。」
ゼアが感心しながら言う。

「メイちゃん、守ってあげるからね。」
怜真がメイの前に立つ。

「…いらない。」
戦いの最中だというのにゼアの慰めが始まる。

「な…！！」

クラウスは絶句した。
目の前に横に一列になって銃を構えた者たちが現れたのだ。

「これで貴様らもお終いだ！
正義のために、消えろ！！」
引き金を引こうかというところで、何者かの声が聞こえた。

「正義のためなら…彼らを殺すことはおかしいのではないか？」

「イヴァ様…！
申し訳ありません！
この方々は…？」

「彼らは、我々の仲間だ。」

「イヴァさん、助かりましたよ。」
ゼアがイヴァと呼ばれた女性に歩み寄る。

「その言葉づかいと呼び方をやめろ…ゼア。」
彼女の名はイヴァ。
長い紅色の髪で、服装はいかにも軍団の統一者といった感じだが、
赤を基調としている。

「他の仲間のことは後で聞こう。
今は、キヴァードを討ち取る。
…覚悟はできているか？」

「ああ…。行こう。」

「イヴァ様！

エイリス様はもう王の間まで到達しているという情報が入っています！」
兵士の一人が、イヴァに報告する。
「そうか、ならば急ごう。」

王の間では、兵士同士の死闘が繰り広げられていた。
「エイリス！
大丈夫か！」
「はい！
大丈夫です！！
しかし、キヴァードの姿がないのです！」
エイリスが兵士を相手にしながら叫ぶ。
「なに！？」
「父上！」
「私は逃げたりはせんぞ…！
これで貴様らを葬ってやる…！！」
キヴァードが奥のほうから出てきた。
巨大な鏡の様なものを押して…。

「あれは…なんだ？」
クラウスが目を細める。
「まさか…転魔鏡か！！」
ゼアが叫んだ。
「その通りだ。ゼアよ…。
貴様らなどどこかへ飛んでいってしまえばいいのだ…。
のう…。ミリアンヌ…。」
「その通りですね…。お父さま…。」
奥からミリアンヌも出てきた。
「ミリア！
話を聞いてくれ！
なぜこのようなことをしたのか…！！」
「黙れ！！
私はあなたのような偽善者が大嫌いなの…。
憎くて憎くて仕方がなかったわ…。」
ミリアンヌは歪んだ顔で言った。
「ミリア…。」
ゼアが悲しい表情をする。
「お喋りはここまでだ。
飛んでいくがいい！！」
キヴァードが転魔鏡を発動させる。
すると、ものすごい逆風が鏡から出てきた。
まるで、小型ブラックホールのように…。

「くっ…！！
吸い込まれる…！？」
「メイちゃん！！
必ず守るからね…！！！」
怜真は自分を盾にしてメイを守る。
「リーネ！掴まってろ…！！」
クラウスの言葉に、リーネは従った。
「無駄な抵抗はよせ。
転魔鏡に勝てるわけがない…！
最大パワーだ！！」
キヴァードが転魔鏡の逆風の強さを上げる。
「だめだ…！！
吸い込まれる…！！」
クラウス達の抵抗も空しく、皆が吸い込まれていった…。

～第十五話　ヴェイン共和国～
「痛ってぇ…。」

クラウスが目覚めると、そこは屋内だった。
「気づかれましたか。」
鎧を身に着けた老兵がクラウスに声をかけた。
「ここは…。
それにあんたは…。」
「ここはヴェイン共和国のヴェイン城です。
そして私はここの兵のウエインと申します。」
ウエインは丁重に礼をして言った。
「ヴェイン…だと？」
クラウスが目を丸くする。
ヴェイン共和国といったらまさに王都とは地球の裏側といったところだ。
「我が国の浜辺に打ち上げられていたのです。
幸いお怪我は少ないそうで…。」
「はっ！
リーネは？！ゼアは？！」
慌ててキョロキョロするクラウス。
「その方達はお仲間ですかな？
そちらの、ジパングから来たと言う青年から聞いたのですが…。」
ウエインがその青年を見ながら言う。
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ…。
メイちゃんはどこ行っちゃったんだよぉぉぉぉ…。」

壁に凭れ掛かり、涙を流す怜真。

「…メイと、リーネ…。
それに、ゼアとイヴァ達…。
皆いなくなっちまったのか…。」
クラウスはあの時の事を思い出し、悔しがる。

「クラウス様。
あなたはガリアから来たそうですね…。
しかし…一体どうやって…？」
ウエインが不思議そうに言う。

「転魔鏡って…知っているか？」

「転魔鏡…はい、存じておりますが…。
ま、まさか…？！」
ウエインが初めて驚きの顔を見せる。

「その…まさかだ。」

「よっ、起きたかクラウス。」
さっきの顔はどこへやら、にぱっとして怜真が近づき、言う。

「ああ…。
しかし、こうも簡単に離れてしまうことになろうとは…。」

「全く、あの王…。
やってくれるぜ…。」
怜真は右の拳で左の掌を殴り、言う。

「とにかく、仲間を見つけなくてはな…。
この二人だけでは、到底冒険など不可能だ。」
「おお、さっさと仲間見つけに行くぜ！」
「あの…お二方。」
ウエインが二人を何か物言いたげにに止める。
「なんだ？
まさか…敵国から来た奴だからってんで、殺すつもりなのか？
だったら、老いぼれだろうがなんだろうがぶっ潰すぜ…。」
物凄い威圧でウエインに言う怜真。
しかし、ウエインは全く動じずに言った。
「いえ…どうか王にひとつ挨拶を…と思いまして。
もしかしたら、お二方の仲間集めの件、手伝ってくれるやも知れません。」
「そんな事…あるのか？」
「ええ、もちろんですとも。
我等が王は人柄が良く、人望があるまったく素晴らしい方です。」
ウエインがニコニコして言った。
「ああ…そうだったな。すまん。
クラウス、ここの王は信じていいぜ。
こっちでも評判の王だからな。」
「貴様の情報など当てにならん。
会ってみる価値はありそうだ。

王の間に連れて行ってくれ。」
この時、怜真はゼアの存在がどんなに大きいものか初めて判ったという…。

「ファウルス様。
例のガリアから来た者たちを連れてまいりました。」

「ありがとう。
下がっていいぞ。」
ファウルスがウエインに言った。
ファウルスは王にしては若く、若干２９歳だった。

「ほぉ…。
君達が…。」
玉座から立ち、近づいてくるファウルス。

「ファウルス様！
そのように近づかれては危険です！」
ある兵がファウルスに警告する。

「大丈夫。
心配しないで。」
ファウルスがにっこりして兵に言う。

「度胸があるな…。」
クラウスが静かに言った。

「ハッハッハ。
度胸というか、好奇心かな。
君たちに興味がある…。」
クラウスをじっと見ながらファウルスは言った。

「ゼアといい、あんたといい…。
この世の王や王子はどうなってるんだ…。」
クラウスが思わず言った。

「ゼア？あのゼアかい？
彼とは知り合い？」

「ああ。
共に旅をした仲だ。」

「ゼアが…。
君たちは何の目的で旅をしていたんだい？」

「…魔物の殲滅…。」
クラウスはあえて、魔石のことは言わなかった。

「何言ってんだよ。
実際のところ、混沌の魔石を外す為にカオスを倒そうとしてるんだろうが。」
怜真の言葉にクラウスは切れた。
混沌の魔石の事はなるべく言いたくなかった。
クラウスは後で覚えてろよ…と言わんばかりに怜真を睨みつけた。

怜真は魂を抜かれた気分になった。
「混沌の魔石…？！
　まさか君が…？」
さすがのファウルスもこれには驚いたようだ。
他の兵士もざわついている。

「見せて…くれないか？」
ファウルスが恐る恐る言う。
クラウスは無言で右手を差し出す。
ファウルスはクラウスの手をとる。

魔石は人を惑わすような紫の光を放っている…。
ファウルスは確信した。

「まさに…この魔石こそ…混沌の魔石！！」
ファウルスの言葉に王の間が一気にどよめく。

「今回は俺がカオスに選ばれたらしい。
　危険だと思うのなら殺すがいい。」
ギンとファウルスを睨みつけクラウスは言った。

「やめておくよ…。
　僕は君を殺せそうにない…。」
クラウスの目には強い光が宿っていた。
そして、クラウスを殺すことは、何か重大な罪になるような予感がしてならなかった。

「殺しはしないが、牢に入れるか？」
怜真がにやりとして言った。

「いや…最善の協力をしよう。」
ファウルスが玉座に座り言った。

「ガリアからジパングまで兵を送ろう。
その仲間の特徴を教えてくれ。
報告する。」

「ああ、助かる。」
クラウスは僅かながら希望が見えた…。

「リーネちゃん、リーネちゃん！」
ゼアの叫びが聞こえる。

「ゼア…さん？」
かろうじて返事をするリーネ。

「良かった。気がついたんだね。」
ゼアはほっとする表情を見せる。

「ここは…？」
リーネが辺りを見回す。

「判らない…。
見つかったのはリーネちゃんだけだった…。

他の皆はどこに行ったのだろう…。」
ゼアが空を見上げて言った。

「ん…ここは…。」
イヴァが目を覚ました。

「浜…か。
海に落ちてしまったようだな…。」
イヴァは痛む腕をおさえながら、歩き出す。

しばらく歩くと、浜辺に小さな女の子が倒れていた。
「…！
あの子は！！」
イヴァは静かにメイを抱き起こした…。

～第四章　かつての友～

～第十六話　皆の運命～

ゼアとリーネが辿り着いた先はなんとジパングだった。

「あらあら、この辺じゃ見ない顔ね？
外国から来たのかしら？」
着物を着た女性が話し掛けてきた。

「はい、ガリアから来た、ゼア＝レイです。」
ゼアはお得意の社交辞令で返す。

「あらあら、ガリアから？
はるばるこんな田舎によく来たわねぇ。」

「はい。
ところで、この近くにクラウスという、ガリアから来た少年は見かけませんでした？」

「う～ん。
見ないわねぇ…。」

「そうですか…。
なら、紅　怜真は…？」

「紅　怜真！？
まさか…あの紅風！？」
女は急に形相を変えた。

「ええ…」
ゼアは途中で気付いた。
彼はここでは『人斬り』だ！
もしかしたら、警察を呼ばれて、その仲間として処刑されるかもしれない。

「あ、え、いや・・・」
ゼアが誤魔化そうとした時、

「あの紅風が…！
帰ってきたのね！
ああ、なんて素晴らしい日なんでしょう！」
素晴らしい！？
人斬りの帰りが何故これほどまでに…。

「あ、あの…怜真さんは人斬りでは…。」

「ああ、いくら人斬りでも、義賊なのよ。
明治になった世で、明治維新の志士がふんぞり返っていた時よにね、
そいつを殺して、その金を貧しい人達に配っていたのよ。
今じゃ、警察が血眼で捜してるわ。」
義賊…。
それはゼア達王家にとって、相容れない存在。
だが、怜真はゼアを殺そうとはしなかった。
少し疑問を抱えながらゼアは言った。

「あの…。
実は僕らは怜真さんの仲間でして、離れ離れになってしまい、捜索しているところなんです。」

ゼアは事情を説明した。
「あら…そうなの…。
じゃあ、見たら教えるわね。
そうだわ、警察に行ったら？
なにか情報が得られるのではなくて？」
「はい。ありがとうございます。」
ゼアは道を教えてもらい、警察庁に向かった。

「貴様、警察庁に何のようだ。」
警察庁の門番がギロリとゼアを睨みつける。
「ガリア王国から来た、ゼアです。
どうか、通していただきたく…。」
「何？！
ゼア＝レイか？」
もう一人の門番が口を開く。
「は、はい…。」
「指名手配犯だ！

取り押さえろ！」
「なっ…！！」
抵抗する暇もなく、ゼアたちは取り押さえられた…。

イヴァはメイを見つけた後、奥でエイリスも見つけた。
三人は手分けして、この島で生活するために必要なものを取ってくる事にした。

「まさか…無人島に流れ着くとはな…。」
イヴァが徐に口を開く。

「そうですね…。
誰も人がいないとは思いませんでした…。」
エイリスも口を開く。

「…私、散歩してくる。」
メイが立ち上がり言った。

「気をつけてくださいね～。」
エイリスがメイを見送る。

「さて、私が木でも持ってくる。

エイリスは食材を。」
「はい。」

メイは森の奥に来ていた。
「…誰かいる。」
その声に茂みがガサガサと揺れる。
「…出てきて。
出てこないと…。」
「すすす…すいません！！」
茂みから、耳の長い者が出てきた。
「…エルフ？」
「は、はい…。
エルフのルウィンです…。」
「なんで…こんなところにいるの？
エルフは絶滅したんじゃないの…？」

「は、はい…。
確かに僕以外のエルフはいません…。
でも、僕だけがここに…。
そのときの記憶がないのですが…。」
ルウィンはオロオロしながら言う。

「そう…。
もう行かなきゃ。
また来るね。」
メイはそう言って踵を返す。

「はい…。また。」

そして、徐にメイは帰ってきた。

「あ、お帰りなさい。」
エイリスが笑顔で言う。

「…ただいま。」
メイも静かに言う。

「君が散歩している間に、薪と食料は集まった。

安心してくれ。
ところで自己紹介がまだだったな。
私はイヴァだ。
義栄軍の軍長をしている。」

「私は副長のエイリスです。」

「私は…メイ。」

「どこから来たんだ？」
イヴァがメイに聞く。

「分からない…。
封印されていたし、記憶もない…。」

「封印…。
一体どういうことだろう…。」
イヴァが考え込む。

「ごめんなさい。
もう眠い…。」
メイが目を擦って言った。

「ああ、悪い。
この葉をかけて寝るといい。」
人を覆えるほどの大きな葉をメイに手渡す。

「ありがとう。」
礼を言ってメイはそれを受け取る。

「…これから…どうすればいいのだろうな…」
イヴァはこれからの生活の不安を隠しきれなかった…。

～第十七話　エルフと遺跡～
「ファウルス様！
ゼア様らしき人物が見つかったそうです！」
兵士が慌てて報告しに来た。

「何！？
どこだ！」
ファウルスも玉座から立ち上がらんばかりに言う。

「ジパングだそうです！
しかし…」
兵士が言葉を詰まらせる。

「…？
何だというのだ？」

「ジパングの警察に…捕まったそうです…！」
兵士は言葉を振り絞り言った。

「なんだって！？」

「紅　怜真の仲間と疑われ、牢に入れられているそうです！」
「紅風か…！
なぜ、そんな事に！」
拳を震わせてファウルスは言った。
「なぜ？
今俺がここにいるからだぜ。」
「自信満々に言うな。」
奥から怜真とクラウスが出てきた。
「聞いていたのか？」
「悪いな。
だが、貴様がそこまで名の知れた人斬りだったとはな。」
クラウスが怜真に一瞥をくれ、言った。
「これでも…かなりの数の豪族を殺しちまってな。
後悔するべきか…しないべきか…。」
怜真が顔を暗くして言う。
「君が…あの伝説の人斬り…！？」
ファウルスは驚きを隠せない。
「伝説になってるのか？
こりゃいいね。」
「馬鹿か。

今はリーネとゼアを助けるんだろうが。」
「そうだな…。
王様よ、船を用意してくれ。」
「分かった。
兵士を総動員して、船の準備をしろ！」
「は！」
ファウルスの命令で今まで王の間にいた兵士が慌しくなる。

「また…散歩行って来るね…。」
メイが徐に口を開く。
「あ、私もついていっていいですか？」
エイリスがにこにこして言う。
「うん…。行こう。」

森の奥についた2人。
エイリスがきょろきょろして言った。
「ここに…何かあるんですか？」
「…ルウィン…
この人は…いい人だから。」
メイが草の茂みを見ながら言う。
「あ…あ、は、はい…」
観念したかのようにルウィンが出てきた。
「あ…エルフさんですか？」
エイリスもおどおどして聞く。
「は、はい…。
ルルル…ルウィンと申します…。」
人間が2人になったという事で、ルウィンのおどおどはさらに凄まじくなっていた。
「ルウィン…
あなた、食料はどうしてるの…？」
メイが静かに言った。
「ああ…はい。
実は…洞窟に貯蔵してまして…。」
「洞窟…？」

「は、はい。
良ければどうぞ…。
ここでは熱いですしね…。」
三人は洞窟に向かう事にした。

森の奥、さらに奥に洞窟というより、遺跡のようなものがあった。
「洞窟というより…これは人の手で作られた建物ですね…。」
エイリスがキョロキョロして言った。

「は、はい…。
この島を彷徨っていたら、この場所に…。」

「…ここの遺跡には誰かいるの…？」
メイが徐に言った。

「い、いえ…。
僕ひとりだと思っていましたが…。」
怯えるようにルウィンが言った。

「…いるよ。誰か。」
メイが何かに操られているかのように指す。

「あ、あの部屋は…僕もまだ行った事なくて…
でででで、でも…怖くて…。」
ルウィンは頼りなさ全開で言った。

「あ、あの…なにがいるんですか？」
エイリスも怯えて言う。

「…強いもの…。
私たちじゃ…勝てない…。」
そう言ってはいるものの、顔色一つ変えないで言うメイ。

「あああああ…あの…。
開けなければ…いいんですよね…？」

「うん…。
多分…。」

「あ、あ…そうですか…。
あああ、あの…食料に困っているのなら…持っていってください…。
あああああ、あんなに…いらないので…。」
ある小部屋を指し、ルウィンは言った。

「うん。
エイリスさん。
あなたも手伝って。」

「はい。了解しました。」
にこにこしてエイリスは言った。

一方、ジパングでは…。

「くっ…また捕まるとは…。」
ゼアが悔しそうに言う。

「ゼアさん…指名手配されてたんだね…。」
リーネが重い口を開く。

「そこが一番の失態だった…。
きっと、どこの国に行ってもそうだろう…。」

「私達…ここで死ぬのかな…。」

「大丈夫だ。
必ず、抜け出すさ…。」

「帆を上げろー！！」

一人の兵士が叫ぶ。
「よっしゃあ！
出航だー！！」
怜真が叫んだ。
徐々に船が進みだす…。
「リーネ…ゼア…
無事でいろよ…！！」
クラウスは、胸に手を当てた…。

～第十八話　血塗られた少年～
「この２人に判決を言い渡す。
『死刑』。」
その言葉に、二人は驚きを隠せなかった。
「な…！！」
「この罪人達を牢に入れておけ。」
「はっ！」
裁判長が兵士に命令する。
「馬鹿な！
こんなもの！詐欺だ！！」

ゼアが兵士の腕でもがきながら反論する。
「黙れ。
これは公平な判決だ。」
「くそっ…！！
クラウス君…！！」

「クラウスさん…
知っていますか？」
一人の兵士がクラウスに怯え気味に言う。
「なんだ？」
クラウスが聞く。
「この近海に…『海物』が出るんです…。」
「怪物だと？」
クラウスがオウム返しで言う。
「はい…。
死の怪物が…と漁師の者が…。」
「死の…？

まぁ、いたとしても、俺が倒す。
航海を続けろ。」
「は、はい！」
兵士はどこか誇らしいクラウスに感銘を受けたようだ。
「な～に気取っちゃってんの。
本当は怖いんじゃない？」
怜真が哀れなおちょくりにかかる。
「お前には負ける。」
ゼアさえいてくれれば…と果てしなく思う怜真だった。
「ところで…お前はどう見る？」
急にクラウスが怜真に疑問を投げかける。
「あ？
怪物の事か？」
「ああ、魔物か…それとも異端の者か…。」
「…どちらにせよ、俺たちがいるんだ。
楽勝だろうぜ。」
「ああ…そうだな。」
怜真は少し驚いた。
あのクラウスが自分の事を否定しないのだ。
「お…お？
熱でもあるのか？」

おどおどしながら怜真が言う。

「いや、すまない。
少し、臆病風に吹かれたようだ。
気にしないでくれ。」
苦笑いをして怜真に言うクラウス。
怜真は少しクラウスの事を分かったような気がした。

「グォァァァ…」

「ぐ…！」
叫ぶ事もできず、兵士は殺された。
異端の者達は、見回りの兵士を次々と殺していく。

「おい…
なんか、兵士が減ってないか…？」
怜真が異様な空気を感じ取る。

「…！！！
しまった！！
早く皆を戦闘態勢に入るように言ってくれ！！」
クラウスはそう言って、走っていった。

「おお、任せろ！」
怜真は、クラウスとは反対側に向かった。

それは、魔物というべきなのか、呪いというべきなのか…。
白骨共がうようよ徘徊していた。
人を素手で貫き、内蔵を抉り出す。
この世の光景とは思えなかった。

「はっ！！」

斬っても斬っても、カタカタと笑い、また復元されていく…。

「ならば…！！
『ヴォルカニック・ブレイド』！！」
それを受けた白骨は体内から爆発が起こり、粉々に吹き飛んだ。

「…あまり…魔石の力は使いたくないのだがな…。」
クラウスは白骨に一瞥をくれ、呟いた。

「おい！
怪物が出たぞ！！
勇気のある奴は戦闘態勢！

臆病もんはそこら辺に隠れてろ！」
怜真のうまい言葉でほとんどの兵士が武装した。
「よっしゃ、今はクラウスだけで戦ってるからな！
俺たちも行くぜ！！」
甲板へ出るための扉を開け、一気に飛び出す怜真と兵士達。

「遅れんなよ！
ビビってないで攻撃しな！！
魔石宿してる奴は今回ラッキーだったかもな！！」
そう言って、クラウスを探しに行った怜真。
船の先端で、奮闘しているクラウスを発見した。

「おい、俺にもやらせろよ。」
怜真はそう言いながら、白骨を風の速さで粉々になるまで斬りつける。

「ふん。
人以外のものを斬るのは初めてじゃないか？」

「おお、言うんだったら見てな。」
2人は一気にたたみにかける。
クラウスの背中に来た白骨を怜真が倒し、
怜真の背中に来た白骨はクラウスが倒し、
徐々にその数も減っていった。

「減ってきたな…。」

「怪物も無限じゃないって事さ。」

「ここでいっちょ、やってみるかい？」
怜真がにやりとして言った。
「俺は魔石を使うのは控えたいのだが？」
それでも、クラウスの顔には笑みがこぼれていた。
「よっしゃ、構えな。」
怜真はそう言って、水の魔石が宿った右手を突き出す。
「言われなくとも。」
クラウスも左手に宿った紅炎の魔石を突き出す。
「いくぜ…『ブレイジングストーム』！！！！」
二人は同時に叫んだ。
すると、炎と水の混じった竜巻が白骨達を飲み込んでいく。
水ですくいあげ、炎で灰と化す。
二人の協力攻撃だった。
2人は白骨達を殲滅させるとハイタッチを交わした。

「おい、今日が死刑執行の日だ。
出て来い。」

兵が牢の扉を開け、二人を連れ出す。
結局2人は何もできずじまいだった。
リーネとゼアはクラウス達への申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

しばらく歩くと、絞首死刑執行場に着いた。
「あの縄の輪に、首をかけろ。」
2人を連れてきた兵士が命令した。
二人は大人しく従うしかなかった。
そして、2人の目の前に、裁判長が現れた。

「くっくっく…。
尿糞を垂れ流し、死んでいく様をまた見れるとはな…。」
裁判長は狂ったように笑みを浮かべる。

「貴様…！！」
ゼアが歯を食いしばり言った。

「もう遅いのだよ。
兵士は完備しているし、もう君たちに逃げ場はない…。
くっくっく、哀れなものだねぇ…。」

「貴様…本当に裁判長なのか…？」
ゼアはその裁判長の姿を哀れにも見えた。

「ああ…もともとは、人斬りだよ…。
名前を聞いたら分かるかな…。
私の名は、『織田　残奇』
織田家を追放された身だよ…。
でもね…あの時代は人を殺さないとだめだったんだ…。
その功績をが認められここにいるわけさ…！！」

どこを向いているかどうか分からない目が飛び出した。
「なぜ…そんな政治を…！！」
ゼアは悔しそうに言う。

「おっと、冥土の土産はここまでだ…。
兵、台を引く準備を。」
だが、誰も応答しなかった。

「おい！！
どうした！！
早く…！！」
振り向いた瞬間、残奇は目を見開いた。
血塗られた剣をもった少年がいたからだ。

「貴様…！！
何者だ！！」
2人は、クラウスだと思った、だが、違った。

「俺の名は…カイル・ソルネット。
貴様を殺す者だ…。」
カイルの表情は、怒りに満ちていた…。

～第十九話　開かずの間～

「貴様を殺す者だ…。」
カイルはそう言った。
リーネは信じられなかった。
あのカイルが剣を持ち、さらに人を殺すなど…。

「か、カイル！」
リーネが叫んだ。
だが、返答は帰ってこない。
確かに容姿や声はカイル本人なのに…。
どこか違うカイルの雰囲気に、リーネは涙が出そうだった。

「ききき…貴様！
わわわ、私を殺すだと…？！」
残奇は平静になろうとはしていたが、明らかに慌てていた。

「さらばだ、愚かな者よ。」
そう言って、カイルは剣を振り上げる。

「カイル！！！！！」
どこからか、クラウスの声が聞こえた。

「…。」
カイルは目を瞑り、剣を下ろした。

「カイル…何故お前が…。」
クラウスは困惑していた。

「ごめん…。
でも…やらなきゃいけないんだ…。」
カイルは悲しそうな笑みを見せる。

「今まで…なんで顔見せなかったんだよ…！」
クラウスが歓喜にも似た表情を見せ、カイルに近づく。
だが、ある程度近づくとカイルは剣をクラウスに向けた。

「ごめん…。
これ以上近づかないで…。
僕…揺らぎそうになる。」

「カイル…。」

「リーネのこと…頼むよ…。」
カイルはそう言って姿を消した。

「…。」
クラウスは何もいえなかった。

「クラウス…」
リーネが近づいてきた。

「俺は…カイルに…何かしちまったかな…。」
その場の雰囲気は重く、悲しかった…。

「おい…。
　こんなたくさんの食料…どこにあった…？」
イヴァはたくさんの食料を見て言った。
しかも、加工されているもんだから疑うのも無理はない。

「エルフさんにもらったんです。」
エイリスがにこにこして言った。

「エルフ…？
　こ、この島にいるというのか…？」
イヴァは驚きを隠せない。

「はい。」
やはりエイリスはにこにこしている。

「あのな…仮にもエルフは魔族だぞ…？
　それに絶滅したと聞いたが…。」

「大丈夫…。
　彼、悪い人じゃない…。」
メイの言葉にはなぜか説得力があった。

「わ、分かった…。
　明日、私も連れて行ってくれ。」

「分かった…。」
そして、夜が更けていった…。

次の日の朝、三人はいつもの場所に着いた。

「ルウィン…。
ごめんなさい…。
怖いのは分かるけど…この人も悪い人じゃないから…。」
やはり、茂みに向かってしゃべるメイ。

「すすすすすすす…すいません…。」
ルウィンが茂みから出てきた。
やはり、いつもよりもおどおど度がアップしていた。

「この節は、食料を分けてもらってすまない。
私は、イヴァだ。
よろしく。」
そういって、手を差し出すイヴァ。

「あああああああああああ、あの…
こ、この手に何の意味が…。」
差し出された手に怯えるようにルウィンが言う。

「ああ、手と手を握るんだよ。
握手って言うんだ。
友好の関係を作るための行動かな。」

「ははははははは、はい…。」

ルウィンは震えながら、ゆっくり、ゆっくり手を伸ばす。
そして、握手を交わした。

「今日は…イヴァさんもいるから…遺跡の…あれに…会う…？」

「えええええ？ええええええええ？！
ちょ、つ、強いものでは…なかったのでは…！？」

さらにおどおどしてルウィンが言う。

「大丈夫…イヴァさん、強いから…。」

メイの言葉にイヴァは理解できなかったが、とりあえず遺跡に向かう事にした…。

「ルウィン…。
こんな所に住んでいたんだな…。」

イヴァは少し感心したように言う。

「は、はい…。」

イヴァが危害を加えないところを見て、少し落ち着いたルウィンであった。

「開けたよ。」

メイは言った。

「ひ、ひいいいいいいいいいいいいいいい！！！！」

何の前触れもなく、メイはあの開かずの扉を開けてしまったのだ…。
そして、中から人らしき者が…。
「あ、ルウィン。」
中から、エルフが出てきた。
「あ…サイヴァ…。」
「知り合い？！」
エイリスとイヴァは同時に叫んだ。
「どどどど、どういうことだメイ！
敵じゃないぞ！！」
「殺気があるとは言ってない…。」
メイは顔色ひとつ変えずに言う。
「どどどど…どうしてここに…？」
ルウィンがサイヴァに言う。
「いや…なんか…気付いたらここにいた…。」
「あ、あの…ルウィンさんとサイヴァさんはどんな関係ですか…？」
エイリスが恐る恐る聞く。
「エルフの村にいたとき、親友だったんです…。
まさか…こんなところで会えるなんて…。」
「ほんと、奇遇だよなぁ…。」

サイヴァの適当な言動に、イヴァは本当に親友なのかと疑問を持ったという…。

「あ、あの…今日はここに泊まっていきませんか…？」

「分かった。」

メイが了解した瞬間、イヴァとエイリスの運命も決まった。

「こちらの部屋へ…。」

こうして、遺跡での夜を過ごしていった…。

～第二十話　ファウルスの決断～

肌寒い夜に、サイヴァは徐にベッドから出る。

遺跡から出て、夜風に当たる。

「…あなた、隠してる。」

メイが遺跡から出てきた。

サイヴァは初めて驚きの顔を見せる。

「…ばれちゃったか。」

サイヴァは、あの時の声とは違う、優しい声を出した。

「あの遺跡…あなたの物でしょ。」
「君には負けるね…。
そう、あの遺跡は、僕達『シャハン』の住居だったのだから…。」
悲しい目でサイヴァが言った。
「シャハン…。悪魔…。」
「そう…世間体では、悪魔だ。
だけど…僕らは一回も人間を襲ったりはしていない…。」
「わけは…分からないんでしょ？」
「ああ…。
きっと…誰かにはめられたんだ…。」
サイヴァは悔しそうに拳を握る。
「…明日…一緒に国に行かない…？」
メイは急に話を切り出した。
「国…？」
「私達の仲間が…そこにいるの…。
シャハンの生き残り…いるかもしれないから…
一緒に旅しない…？」
「…ごめん。
僕はここにいる…。
シャハンとばれたら…君たちに迷惑がかかるからね。」
サイヴァが悲しい笑みを見せる。

「ルウィンは…連れて行ってくれないかな？
２人で暮らすとなると…さすがにシャハンだって事がばれそうで…。」

「…あなたはどうするの…？」

「ここで…一生を終えるさ…。
『悪魔』は消えた方がいいだろうからね…。」

「あなたは…本当にそれでいいの？」

「構わない…。」
サイヴァは憂いを秘めた表情で言った。

「…分かった…。
でも、あなたの人生は、あなたで決めて…。
…過去に囚われないで…。」
そう言って、メイは遺跡に戻って行った…。
サイヴァは、何か考えているようだった…。

早朝、メイは広間に仲間達を呼んだ。

「メイ、こんな朝早くに、何をしようというのだ？」

イヴァはもう完全に目覚めていた。
「ふわぁぁぁ…。」
エイリスはまだ眠そうだ。
「あ、あ、あの…」
ルウィンは言いたい事を言えない様子だった。
「じゃあ…これから、皆のいるヴェイン共和国に行く…。」
「な、皆はヴェインにいるというのか？！
それに…行くって言ったって…無理に決まっているだろう…」
「…私には…できる…。」
「ちょ、ちょっと待ってください！
サイヴァを置いて行くのは…」
ルウィンが必死に言葉を搾り出す。
「…ごめんなさい…。」
メイはそう言って呪文を唱えだす。
広場には巨大な魔法陣が浮き上がる。
「こ…これは…！」
イヴァが驚愕して言った。
「さ、サイヴァ！！」
ルウィンは部屋の隅にいるサイヴァを見つけた。
「悪かったなぁ…ルウィン。

俺…シャハンなんだよ…。
エルフじゃない…。」
サイヴァは少し微笑んで言った。

「…！？
サイヴァ…」
ルウィンは憂いをこめた表情をした。

「じゃあ、な。
もう…二度と会わないだろう…。」

「サイヴァ！
僕…僕、サイヴァがどんな人でも！
…親友だから…。」

「ルウィン…。」

「今まで…迷惑ばかりかけて…ごめん…。
でも…今までずっと…楽しかった…。」
ルウィンはそう言って消えていった…。
サイヴァの目には、一粒の光が見えた…。

ヴェイン城の王の間は、突如閃光が走る。

その閃光が止む頃には、ルウィンを含めた四人は、ヴェイン城の王の間に現れていた。

「な、なんだ？！」
ファウルスが、仰け反りながら言う。

「…ご無礼をお許しください。
メイの特殊能力により…ここに辿り着きました…。」
イヴァは慌てないように努めながら言った。

「イヴァ…それにエイリス…。
その小さな子が…メイか。
しかし…そこの少年は…？」

「はっ…。
こちらの少年はルウィン。
エルフの生き残りです…。」

「エルフ…。
なるほど、噂には聞いていたが…。」
ファウルスがルウィンに近づくが、当のルウィンはメイの陰に隠れる。

「あ、あ、あ…あの…
あ、あんまり近づかないでください…。」
ルウィンがおどおどして言う。
すると、後ろからなにやら人の話し声が聞こえてくる…。

「ゼアとリーネを連れて、今戻った。」
クラウスが先頭に立って言った。

その後ろに、リーネ、怜真、ゼアと続く。
「あ…クラウス。」
メイが少し驚いた表情をした。
「あ…メイ。」
クラウスも言う。
「メイちゃあああああああああああああん！！」
怜真がメイに向かって走り出す。
「グオ！！」
クラウスが裏拳で怜真を倒した。
「無事だったか。」
クラウスが何事もなかったかのようにメイ達に言う。
「私のテレポートで…。」
メイが少し疲れたように言う。
「そうか、苦労をかけたな。」
「イヴァ、君はどこに飛ばされていたんだい？」
ゼアが前に出て、言った。
「とある無人島にな…。
そこにエルフがいたから、連れてきたんだ。」
イヴァがルウィンを見て言う。
「…ルウィン。

悪い人は…いないから…一部を除いて。」
その時、メイの言葉になぜか怜真は落ち込んだという…。

「あ、あ…
は、初めまして！
ルルルルル…ルウィンと申します！」

「そうか、ではルルルルル＝ルウィン。
お前も俺たちと共に戦ってくれるのか？」
クラウスの天然ボケが炸裂した。

「あ、あ、あ、ち、ちがうんで…す…。」
だが、ルウィンの声は周りの雑談にかき消された。

「では、皆聞いてくれ。
これから皆は、ガリアに向かおうと思っているところだと思う。
だが、行ったとしても、また転魔鏡を使われるのは言うまでもない。」

「だが…見過ごすわけには行かない。」
クラウスが厳しい表情をする。

「まぁまぁ、聞いてくれ。
そこで、大臣たちと相談した結果…
我が国はガリアと戦争する事に決まった。」
賑わっていた王の間が…一気に静まり返った…。

～第五章　混沌の神～

～第二十一話　開かれた扉～

「我が国はガリアと戦争する事に決まった。」
ファウルスの言葉が響き渡る…。

「なん…だと？」
クラウスが唖然とする。

「王！
正気ですか？！
ガリアとヴェインはかなりの距離…。
それまでの兵の疲労で、勝てる確率は大きく下がります！！」
イヴァがファウルスを説得しようとする。

「正気だとも。
大丈夫だ。
我が国の兵に、そのようなやわな者はいないさ。」
ファウルスが笑顔で言う。

「それに…ガリアを落とすには…転魔鏡をなんとかしなくてはならない。
転魔鏡を動かすには、魔力が必要だ。
ガリア王は膨大な魔力を持っている。
だが、無限ではない。
兵を総動員して、キヴァードに挑む…！」

「もはや…質より量作戦とでも呼ぶべきか…。」
クラウスが蚊のような声で言う。

「それで…いいね？」
ファウルスはゼアを見て言った。

「…お願いします。」
ゼアが決意に満ちた表情で言った。

「今回の総隊長は、クラウス君。
君にお願いしたい。」
ファウルスが満面の笑みで言う。

「…イヴァの方が適役ではないのか？」
クラウスは表情を変えずに言った。

「いや…君にやってもらいたい。」

「私からも、頼む。
今回の戦い、君に任せよう。」
イヴァも前に出てクラウスに言った。

「全ての気持ちをこの戦いでぶつけるといい。」
ゼアが微笑みながらクラウスに言う。

「クラウスがいれば、私、何でもできるような気がするよ。」
リーネがクラウスに言う。

「なぁに。
俺がいるんだ。
この戦い、何があろうと勝ちに転がるぜ。」
怜真がクラウスの肩を叩く。

「いや、お前いらない。」
クラウスの言葉の前に、怜真は砕け散った…。
そして、ゼアの慰めが始まる…。

「クラウス…。
あなたには、皆にはない力がある…。
だから…物事を謙虚に受け取ってはだめだよ…。」
メイがクラウスに近づいて、言った。

「分かった。
…俺が、総隊長を務めよう。」

「君ならそう言ってくれると思っていた。
さぁ、城の外の広場に兵と、義栄軍を集めてくれ。
早速、総隊長様を紹介しなきゃね。」
ファウルスは兵にそう伝えた。

広場には、何千、いや、何万の兵達が集結した。

「義栄軍とヴェイン兵が集まればたいした数になるな…。」
ファウルスがつぶやく。

「俺は…皆を統べる自信がないんだが…。」
クラウスは緊張と不安が入り混じった表情をする。

「大丈夫、自分を信じて。」
そう言って、ファウルスはクラウスの背を押した。
クラウスは広場の奥の台に立つ。
皆が静まり返った…。

「…俺の名はクラウス。
自慢するつもりはないが、カオスに選ばれてしまった者だ。
今回は、ファウルス王の推薦で総隊長を務めることになった。
こんな子供が…と思う奴も少なくないだろう。
無論、俺も反対はした。
それに、俺は自分の力に過信もしていない。
なのに、総隊長を務めることになったのは、俺にしかできない事があるから。
皆にも皆にしかできない事柄があるだろう。
それが、たまたまこのような形でつながってしまったようだ。
だから、俺は運命に叛かない。
皆も、その運命に従うのであれば、俺の言う事を聞いてくれ。」
クラウスは自然に浮かんできた言葉を全て言った。
広場に沈黙が流れる。
そして、イヴァが台に上がった。

「私が、今回の戦いの軍師を努める、イヴァだ。
クラウスが総隊長を務める上で納得できない者は
早々に立ち去るがいい。」
だが、誰一人去る者はいなかった。

「…では、クラウス。
出陣の合図を。」
イヴァが台を降りる。

「用意がよければ、すぐに船を出す。
皆、出陣だ！」

「オオオ！！」
兵達は、声を揃えて叫ぶ。
皆が、船の準備にかかる。

「お疲れ様、クラウス。」
ファウルスが優しい笑みを見せる。

「いや…戦いはこれからだ。
ここで疲れていては話になるまい。」
クラウスはそのまま港へ向かう。

「ファウルス様。
私達も港へ向かいましょう。」
イヴァがファウルスに言う。

「ああ、そうだな。」

船に、積めるだけの糧を積み、武器という武器もありったけ積んでいた。

「総隊長！
第二戦艦、準備完了しました！」
隣の船から、兵の声がする。

「了解した。」
クラウスが兵に応答する。

「ついに事は戦争にまで…か。」
怜真が呟いた。

「そして俺は…総隊長…。
世の中分からないものだ。」
クラウスが海の遥か先を見つめて言う。

「やっぱり、お前自分のせいで勝てないだろうとか考えてるんだろうよ。」

「ちっ…。
貴様に心理を読み取られるとは…。」
だが、クラウスは笑みを見せていた。

「俺も…よく倒せない敵に挑んだもんだ。
仕事柄があれだからな。
だが、俺はこうやって生きている。
あんときゃ、仲間がいたからよ。」

「仲間…か。

ある時は戦力になり、ある時は足手まといだ。
それに、仲間に傷ついてはほしくないのが俺の本音だな。」

「バカだな～。
仲間だってお前の役に立ちたいと思ってるんだぜ。
それを断った日にゃ好感度ダウンじゃねぇか？」
怜真がニヤニヤして言った。

「…そうだな。
俺だって、そうだ。」

「ここは…お前がきっちり命令するんだな。
何かして後悔した時より、何もしないで後悔した方が、
悔やまれるんだからよ。」

「ああ…。
今回ばかりは遠慮するわけにもいかないな…。」

船内の部屋の一室で、イヴァは作戦を練っていた。
すると、コンコンと二回のノックが聞こえた。

「開いている。」
イヴァはそれだけ言った。
扉は開かれ、そこにはゼアが立っていた。

「ゼア、どうした？」
イヴァがテーブルの上にある地図を見ながらゼアに言う。
「いや、もしかしたらこれが最後かもしれないだろう？
軽く飲まないかい？」
ゼアがなにやら瓶を持って言った。

「…いいだろう。」
ゼアはイヴァの正面に座った。

「ヴェインの最高級ワインだ。
ファウルス王からだよ。」

「ファウルスは何を考えているのだろうな？」
イヴァが初めて笑みを見せた。

「さあね。」
ゼアも微笑んで言った。

「ここのグラスを使っていいかい？」

「構わない。」
ゼアは立ち上がり、棚にあるグラスを手に取り、座った。
そして、瓶のコルクを開けてグラスに注ぎ始めた。

「色、香り、ここまでは完璧だね。」
ゼアはワインを注いだグラスをイヴァに手渡し、言った。
イヴァは黙ってワインを口につける。

「どうかな？」

「お前も飲んでみたら分かる。」
イヴァはまた笑みを見せて言った。
ゼアもワインをグラスに注ぎ、口にする。

「…なるほどね。」
ゼアはにやりとした。

「まさか…このような形で再会する事になろうとはな。
正直、私はお前を倒さなければならないような気がしていた。」
イヴァは真剣な目つきでゼアに話す。

「そうだね…。
僕も君が義栄軍の軍長をやっているなんて、
思ってもみなかったよ。」

「運命とは逆らえぬものだ。
ガリア国王を毛嫌いしていた私が、まさか王子と
面識をもつなどと…。」
イヴァはにやっとして言った。

「よしてくれよ。
僕だって、そりゃ嫌だったさ。
でも…なかなか決心ができなかった。
しかしまぁ、今はクラウス君のおかげでふっきれたさ。」

「あのクラウスという少年…。
カオスに呪われているというのに、全くの濁りのない目…。
経験をしてきた証だな。」

「きっと、理の神様に認められているんだよ。」
「そうかもしれないな…。」

「ぼ、僕は…どこで仕事をすれば…。」
ルウィンがおどおどしながら言う。

「あ、ルウィンさん。
ちょっとこの武器を武器庫に運んでくれませんか？」
エイリスが数個の拳銃やライフルを持って言った。

「は、はい！
喜んで！」
ルウィンはそれを受け取ろうとするが、見事の全てが甲板に落ちた。

「あ、あああああああああああ！
だ、だだだ大事な武器を！
す、すいません！！」
ルウィンが何度もペコペコしながら言う。

「だ、大丈夫ですよ。
はい、今度はお願いしますね。」
エイリスは素早くそれらを拾い、ルウィンに手渡した。

「は、はい！
承りました！！」
ルウィンはよたよたと武器庫に向かった。

リーネとメイは、船内の部屋で準備ができるのを待っていた。
「メイちゃんは…何も覚えていないの？」
リーネが徐に聞く。

「うん…。
でも、うっすらと、景色は浮かぶ…。」
メイが何か懐かしむかのような表情をする。

「景色？」

「そう…。
ここに来る前に…よく見ていた景色…。
その時の喧騒を離れて、よく行った…。」

「そう…。
それは、どんな景色？」

「森の奥の…丘。
他のところは建物が建って、自然を感じられるのはそこだけだった…。」

「森の奥の…丘…。」
リーネはかつての思い出を思い出していた…。

「総隊長！
全ての戦艦の用意ができました！」
兵がクラウスに報告する。

「よし…出撃だ…！！」
クラウスの合図の後、兵達の声が轟いた…。

～第二十二話　悪の根源～
「王！
ヴェイン軍が攻めてきます！」
兵が慌ててガリア城の王の間に走りこむ。

「なんだと！？
私の魔力も回復しきれていないというのに…！！
おのれ、ファウルス…！！

今すぐ、戦闘態勢をとれ！！」

「はっ！」
兵が慌てたまま、王の間を飛び出す。

「取り乱すとは…みっともないですよ、王。」
どこからともなく一人の少年が現れた。
その顔は少女と間違うほどの美貌だった。

「誰だ貴様は！？」

「お忘れですか…？
僕はエヴァーノの軍師、キルです。」
キルは笑顔を作って言った。

「キルか…。
これから、ガリアはヴェインに攻められる。
早く、どこへなり消えるがいい。」

「いえ、僕はガリアに力添えするように命令され来たのです。
シャルや、ヴォレアスが来ますよ。」

「そうか…！！
ならば勝機が見えてきたぞ…！
くくく…ファウルスめ…ここに攻めた事を後悔させてやる…！！」
キヴァードの不気味な笑い声が王の間に響き渡った…。

『クラウスと怜真が第一戦艦…。
メイとリーネが第二戦艦…。
私とゼアが第三戦艦で…
エイリスとルウィンで第四戦艦を守ってもらう。
第一戦艦を先頭にする。
私達で援助をするから、必要な時に呼ぶんだ。』
イヴァの言葉が頭に甦った。

「…なんだ…？
一隻の船が…近づいてくる…？」

「ありゃあ…エヴァーノの旗だぞ…！？」
怜真が驚愕して言う。

「ま、まさか、エヴァーノがガリアに加担していたのか！？」

「くそっ！
こいつはしてやられたな…」

「しかし…怯む事はない。
相手は一隻だ。
大砲を一斉発射すれば問題ないだろう。」
そう言っている間に、その船はどんどん近づいてくる。

「砲撃用意！！」
兵が大砲の方へ走る。

「…発射！！」
数個の大砲の弾が物凄いスピードで飛んだ。
それは、一隻の船を貫いた。
「よっしゃ、命中！」
怜真がそう言ったが、その船は何事もなかったかのように進みだす。
「ば、馬鹿な！？
あれほどの砲撃を受けたというのに！！」
「クラウス！！」
隣の船からイヴァの叫びが聞こえる。
「あの船は幻影だ！！
だが、大砲をかわした今、実像を露にしている！！
もう大砲は、あまりに至近距離で使えない！！
今すぐ、戦闘態勢に入れ！」
「だそうだ！
皆、武器を持て！！」
クラウスの命により兵は武器庫に向かう。
「多分…あの幻影も転魔鏡によるもの。
厄介な物を持ってやがる…！」
怜真が歯を食いしばる。
やがて、その船は第二戦艦に近づいてきた。
「皆！
ありったけの火矢を打て！！」

クラウスの命で、弓を持つ兵全てが火矢を放つ。
「燃えてはいるが…くそっ！
あの船は不死身かよ…！！」
「あの船に近づいて、白兵戦にもちこむんだ！」
船は徐々にその船に近づいていく。
だが、その間にも、第二戦艦は攻め込まれていた。
第二戦艦の様子にクラウスは戦慄を覚えた。
「くそっ…！！
リーネとメイは…！？」
すると、クラウスの後ろに風の様なものが走った。
そこには、リーネとメイがいた。
「テレポートか。」
クラウスが納得する。
「第二戦艦はもう駄目…。
あの船に乗ってる人…皆が皆強すぎる…。」
メイが珍しくも歯を食いしばって膝をついた。
「おい、大丈夫か！？」
「メイちゃん！
どうして…！？」
怜真がメイを抱きかかえる。
「ちょっと…テレポートを使いすぎたみたい…。
人が多ければ多いほど、負担がかかって…。」

メイはそれを言い終わると気絶した。

「レイ、メイを船室に。」

「ああ。」

怜真はメイをおぶって船室に向かった。

「よし…そろそろ乗り込むぞ。
　リーネはここから弓で援護してくれ。」

「分かった。」

次の瞬間、兵が木の橋で二隻の船を繋げた。

「突撃！！」

クラウスの命で全員が敵船に乗り込んだ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

兵は唸りを上げて敵兵を屠る。

「紅炎の魔石よ…！！
　フレイムランス！！」

クラウスの左手から、槍の様な炎が飛び出す。

それに次々と敵兵が貫かれた。

また、その魔法を唱えようと思った瞬間、後ろから殺気が――。

やられると思った瞬間、その殺気は消えた。

「後ろも気をつけたほうがいいよ、クラウス君。」

ゼアが血のついたレイピアを拭っていた。

「ゼア…という事は、第三戦艦も…？」

第三戦艦もすでに敵船につけていた。
「ああ、これで一気に形勢逆転して見せるよ。」
ゼアはそう言って、次々と敵兵を屠る。
「総大将を倒せば、無駄な殺生は必要なくなる…。」
クラウスは、敵船の船室に向かった…。

「クラウスは総大将を倒すつもりだな…。
いい判断だ。
だが…総隊長の単独行動は感心できないな。」
イヴァがセリュクストと呼ばれる剣で一気に二人の兵を屠る。
セリュクストとは、女神が所持していたと言われる伝説の剣で、
様々な装飾もされている。
さらに、流れるように斬りつけるので、相手は痛みを覚える事無く
息絶えるという。
「行ってあげたいところだけど…ここの兵達の強さは半端じゃない
…！！」
「かなり訓練された者達だな…。
さすがエヴァーノ軍といったところか――。」

「…貴様が総大将か。」
クラウスが大男の後姿を睨みつける。

「いかにも。
　わしが、ここの船の大将だ。」
その言葉と共に大男は振り向いた。
厳つい大男が、クラウスを見下ろす。
物凄い威圧でクラウスを近寄らせない。

「お前さんも総大将じゃないかい？
　一人で乗り込むとは、たいした度胸だ。」
くっくっくと笑いながら大男は言う。

「…俺と戦え。」
クラウスが油断なくヴォルノ・エッジを抜く。

「喧嘩っ早いのは嫌いじゃないが、生憎わしは武器を持ってないのでな。
　この拳を受け止められたなら、受けてたとう！！」
この大男の拳とは考えられないくらいのスピードだった。
クラウスは動く事もできなかった。
しかし、クラウスに当たる寸前に、風が入ってきた。

「…総大将を簡単に倒されたら困るんでね。」

刹那の速さで大男の拳を止めたのは、やはり怜真だった。
「レイ…！！」
「速い…
それに、拳を止める技量も申し分ない。
気に入ったぞ！
わしの名はヴォレアス。
いつか、決着をつけようぞ…」
そう言って、ヴォレアスは消えた。
「消えやがった…。
これも、エヴァーノの技術かよ…。」
「…すまなかった。」
「なぁに。
お前が単独行動するのは、イヴァさんにはお見通しだったようだぜ。
そんで俺が監視役になったわけ。」
怜真がにやにやして言った。
「…そうか。
以後気をつける。」
クラウスと怜真は、甲板に出た。
すると、もうすでに決着はついていたようだ。
「すまない…イヴァ。」
クラウスはイヴァの元に行き、頭を下げて謝る。

「お前のこんな姿を見たら、士気も下がる。
早く、第一戦艦に戻るんだ。」
イヴァは厳しく言ったが、顔は微笑んでいた。

「了解した。」
ここで落ち込んでは話にならない。
すぐにクラウスは気持ちを切り替えた。

「目標は…ガリア。
全速前進！！」
ついにクラウス達は、ガリアの地を再び踏むことになる…。

～第二十三話　君～
「皆、武装をして船を下りろ。」
兵はそのクラウスの命に従った。
ついに、クラウス達はガリアの地を踏んだ。

「ここまで来たな…。
こっからは、誰がどこから襲ってくるかわかんねぇぜ。」

「その通りだ。
単独行動は慎め。」
イヴァが怜真の意見にそって言う。

「分かっている。」
「俺が先に行って、偵察してくる。」
「ああ、気をつけてな。」
「大丈夫だって。
へまはやらかさないさ。」
怜真がクラウスに笑みを見せる。
「…。」
クラウスは風と共に消えた怜真を見送った…。

「…出てきな。」
怜真が油断なく言った。
「…。」
風と共に、仮面の男が現れた…。
その男は…ヴィオーラを殺した張本人―シャルク。
「よく分かったな…。
ふっ、ヴィオーラが死んだ事に責任を感じているのか？」

仮面のしていない左半分の唇が薄く笑った事を物語る。
「てめぇ…わざと…！！」
「そうさ…俺がヴィオーラを殺すため…仕向けたんだ…。」
さらに、シャルクの唇がつりあがった。
「俺を…利用しやがったのか――？！」
「あの老い耄れに生きていては困る人がいたのでね…。」
「てめぇ！！」
怜真がシャルクに一気に突っ込んだ。
「銃が武器のてめぇには、この至近距離では話にならねぇだろ！！」
仕込み刃でシャルクの顔を狙った。
だが、金属音が響いた…。
「銃にも…色々あるって事を覚えておくがいい…。」
銃から、刃が出ていた。
それは、まさに「剣」そのものだった。
「ちっ…。」
舌打ちをして怜真は一旦下がる。
「そんなに距離をとっていいのか？
遠慮無く…撃つ。」
その銃口からは想像できないほどの大きな弾だった。
いや…「光」だった。

「くっ…！！」
紙一重だった。
怜真の頬を掠めて光は消えた。
怜真の頬には一筋の赤い糸が通っていた。

「一応言っておこう。
この弾は普通の弾ではない。
聖光の魔石の力を銃口に凝縮し、撃つ。
君は全く魔石の力を使っていないようだが…？」

「俺は…魔石の力に頼らずとも、てめぇを倒す！！」

「…遅すぎるな。
クラウス、ここで油を売っていても、危険になるだけ。
城に向かうんだ。」

「だが…レイが！」

「なに。
私が行く。
私が信じられないか？」

イヴァの言葉はやけに説得力があった。
「いや…あんたを信じる。
俺達は行ってるから、イヴァも早くな。」
「ああ。
では、私は怜真の援護に向かう！
城に向かうものは、クラウス隊、ゼア隊、リーネ隊！
他の者は船を守る事！
では、突撃！！」
イヴァの命で、隊は動いた。
クラウスは不安を抱いていたが、自分を奮い立たせ、城に向かった…。

「…船にも、幾人の兵が残っているみたいですね。
負傷者が多いのか…それとも、船に何かあるか…。」
キルが考え込むように言った。
「所詮、ファウルスの手駒共だ。
何も考えずにいるのだろう。」
「王、敵を侮れば、その瞬間敗北が決定いたしますよ。」

キヴァードは何も言えないようだった。

「ヴォレアスがすでに帰還しているという事は…
ヴォレアスを満足させるほどの猛者がいるということですね…。
王、少々お待ちください。」
そう言って、キルは消えた。

「城に前面突入！！
全ての門を制圧するんだ！！」
クラウスの合図に、兵は散り散りになり門を制圧に行く。

「クラウス君、どうやらもう外には敵はいないようだ。
いや…怜真君とイヴァが戦っているが…。」

「やはり…か。
だが、あの2人だ。
きっと大丈夫。
俺たちにできる事をやるんだ。」

「了解。
総隊長。」
ゼアは笑顔でそう言った。

城の中には、思ったほどの兵はいなかった。
やはり、あの時の戦いでの負傷兵が多いのだろう。

「このまま行けば楽勝だが…何か策があるのか…。
それに転魔鏡の事も…。」
そう言いつつ、王の間に向かうクラウス。

「どうかな…。
エヴァーノが加担している割には、兵は少なすぎるし…。
少し、理不尽な事が多すぎるな…。」

「私…思ったんだけど、そう簡単には魔力は回復しないと思うの。
きっと、転魔鏡を操る魔力は膨大。
ということは、まだキヴァードの魔力は回復してないかもしれない…。」
リーネが2人に追いついて、思っていた事を言った。

「なるほど…確かに、転魔鏡を操るには膨大な魔力が必要だ。
もしかしたら、誰一人欠ける事無く、生還できるかもしれない。」
ゼアは、少しの希望に満ち溢れた。

「まぁなんにせよ、油断は禁物だ。」
クラウスがそう言っていた時、十余人の兵たちが追いついてきた。

「総隊長！
我々が、転魔鏡からお守りします！」

「我々が盾になり、総隊長達を守るので、どうかその間に！」

「絶対…キヴァードを倒しましょう！」

「…ああ、ありがとう。」
クラウスは勇敢な兵たちに、心を打たれた。

ついにクラウス達は、王の間の扉の前に辿りついた。
だが、そこには、少女と見間違えるほどの美貌を持った少年がいた…。

「初めまして、あなたがクラウス殿ですね…？
僕は、キルと申します。
以後お見知りおきを。」
キルが怪しい笑みを浮かべながら、自己紹介をする。

「…どけ。
さもなくば斬る…。」
クラウス達は油断なく個々の武器を構える。

「そう気を立てないでくださいよ。
闘うのは僕でなく…この方なのですから…。」
今まで、キルの陰に隠れていた少年が姿を現した。
…カイルだった。

「…！！」

「…。」
カイルは、殺気に満ちた表情でクラウスを睨みつけた…。

「レイ！」
イヴァが着いた時には、もうシャルクの姿は無かった。
だが、脇腹を押さえた、怜真が蹲っていた…。

「…！！
どうした、レイ！！」
イヴァが瀕死の怜真の元へ走った…。

～第二十四話　怜真の死闘～
「…俺は魔石の力など頼らず、お前を倒すぜ。」

「…ふ…ふはははは！
魔石の力無しで生き抜けると思ったら大間違いだ…！
それを今証明してやる…」
そういい終わると、シャルクは消えた。
シャルクは音の速さで怜真の後ろに回り込んだ。
銃口から刃を出し、刹那の速さで振り下ろした。
だが、怜真もまた同じ速さで仕込み刃で受け止めた。

「反射神経は…いいんでね。」
怜真はそう言うと、シャルクを弾いた。
シャルクは間合いを取る。

「ふん…だがな…これならどうだ！！」
シャルクの銃の銃口から光の速さで槍が突き出た。
怜真は完璧に油断していたが、紙一重で急所は外した。

「ぐっ…？！」
怜真は思わず蹲った。

「今までの戦いで分からなかったのか？
俺は遠距離を最も得意とすることが…。」

「甘いな…。
急所は外した。
…次の一撃で、お前を倒す…！！」
怜真はかろうじて立ち上がった。
意識が遠のいていくのが分かる。
だが、気力だけで意識を保っていた。

「…ほう？
その体で…か。
ふん、いいだろう、その攻撃、受け止めてやろう。」
シャルクは銃を腰に下げた。
まさに丸腰だった。

「その行動…後悔させてやるぜ…！！」
怜真は、今までほとんど使わなかった刀を抜いた。

「そ、それは…草薙剣！！」
シャルクは一歩たじろぐほどに驚いた。
草薙剣――最も有名な名は天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）。
三種の神器に称されるほどの神刀。

「いくぜ…不知火流奥義『徽龍閃』！！」
怜真は刹那の速さでシャルクの懐へ立つ。
そして、飛び上がり様に一閃を入れ、着地様に三閃を入れた。
この技は、飛び上がり、相手の後ろに立つ事ができる、つまり、防御もできる奥義である。
さらに、ひるんだ相手の後ろに立つ事ができるので、組み合わせが自由になってくる。

「『紅蓮閃爛』！！」
この技は、不知火流の特徴を大いに使った技である。
不知火流は、自分の中にある『徽』を空中の酸素と混ぜ合わせ炎を纏った剣を生み出す事ができる。
その炎を纏った剣で、相手を四回斬りつけるのが『紅蓮閃爛』なのだ。

「ぐあああ…！！」

「不知火流はスピードが命でな。
それに炎を出すとくりゃ、水も必要だろう。
火傷するからな。
だから、俺の流泉の魔石は、間違って俺を燃やしちまったときの為にあるのよ。
この技の弱点…？
クラウスと技がかぶるところかな。」

怜真は聞かれてもいないのにべらべらしゃべった。

「ちっ…！！
甘かったのは俺のほうか…！！
今度は本気でやってやる…！！！！」
シャルクはそう言って、消えた。

「おお、首を長くして待って…」
怜真は言い終わる前に倒れた…。

「さぁ…甘ちゃんの君たちに、この人を倒せるのかな？」
キルは怪しい笑みを浮かべ、言う。

「外道が…！！」

「これもれっきとした作戦だよ…。」
クラウスとキルは暫く睨みあっていたが、カイルがその沈黙を裂いた。

「殺す…。」
カイルがクラウスに突っ込む。

「くっ！」

クラウスはヴォルノ・エッジでカイルの剣を受け止めた。
間近で見たらよく分かった…。
カイルは正気ではない…。

「カイル…目を覚ませ…！！」

「こ…殺…す…。」
ゼアとリーネは何もできないでいた…。

「ふん、虫と虫の戦いなど、とうに見飽きたわ。
　死ぬがいい、害虫が。」
後ろの方で声が聞こえた。
ゼアとリーネが振り向いたがもう遅く、すぐ近くまで弾丸が迫っていた。
その奥には、憎き、『織田残奇』と、銃を持った軍団がいた…。

「くっ！！」
ゼアはレイピアで自分にかすめよう玉を弾き落とした。

クラウスにまでも、弾丸が迫っていた。
やられる…！！！
クラウスはそう思った。
だが、自分を覆う影が現れた。

「うっ…」
リーネだった。

「リーネ！？」

「…リ…ー…ネ……？」

クラウスもカイルも一瞬時を失った。
「リーネちゃん！！」
ゼアが、リーネを抱きかかえる。
「カイル…お願い…だから…目を覚まして…！」
リーネはそれを言って気を失った。
「…ゼア、隙を見たらリーネを船へ運んで医師に見せろ。」
クラウスは静かに言った。
だが、表情は変わっていた。
「…分かった。」
ゼアが頷いた。
「ふん、虫が一匹死んだだけで、そんなに悲しいか？」
残奇は少し震えているようだった。
「…まだ死んではいない…。
死ぬのは貴様だ…！！」
残奇を睨みつけ、クラウスは言った。
「ちっ、余計な奴が入り込んだな…
とりあえず、キヴァードに報告するか…」
キルがそう言って、姿を消した。
「まだ生きていたか…
性懲りも無く、俺に殺されに来るとはいい度胸だ…！！」
カイルが徐に口を開いた。
クラウスと同じ表情をしていた。

そして…目に光が戻っていた。

「ひ、ひひひひ…！
死ぬのは貴様らだ！
う、撃て！！」
残奇の命令で一斉に弾が放たれた。
だが、今のクラウスとカイルには通用しなかった。
全ての弾丸を叩き落としたのだ。

「そんな玩具で俺を殺せると思ったら大間違いだぞ…！！」
クラウスとカイルはいつの間にか足並みがそろっていた。

「一撃で貴様ら全員葬ってやろう…！！」

「ひ、ひぎゃあああああ！！」
残奇の断末魔が木霊した。
クラウスが周りの敵を一掃し、カイルが止めを刺した。

「…行け。」
クラウスはゼアに言った。
ゼアは無言でリーネを抱え、船に戻って行った。

「…。」
2人は事が終わると、いつか話したような穏やかな表情だった。

「もう…聞かない。」

「ごめん…。
僕はもう…戻れないんだ…。」

「ガリアは…陥落させるぞ。」
「なら…」
カイルは一度戻した剣を再び抜いた。
「仕方がない…わけはないだろうがな。」
クラウスも剣を抜いた。
「行くぞ…」
2人の剣撃が木霊した…

その頃、ゼアは船に戻っていた。
「ゼア…リーネが負傷したのか…。」
イヴァは怜真を医師に診せているところだった。
「ああ、クラウス君をかばってね…。」
「無茶をする子だ…。」
「じゃ、頼みます。」

「ああ、任せなさい。」
ゼアは医師に二人を託した。
「クラウス君一人だし、カイルという子にも何か事情があるように見えた…。」
「なら、行こう、無駄な戦いは絶対に阻止するんだ。」
ゼアは頷き、また二人は城に向かった―。

～第二十五話　平和のために～
「くっ！」
クラウスがカイルの剣を屈んで避ける。
クラウスは、その隙をつき剣を振り上げるが、軽く受け流された。
「…。」
2人は本気を出せるはずが無かった。
こうしている間にも、キヴァードの魔力が回復しているのだと思うともどかしくてたまらない。
だが、カイルがその願いを聞き入るとは到底思えなかった。
クラウスはカイルを気絶させるため、カイルの懐に向かう。
「おおおおお！！」
クラウスは片方の剣を振り上げた。

クラウスは、片方の剣に集中させてもう片方の剣の柄で気絶させるつもりだった。

「ふっ！」

だが、いとも簡単にその策は敗れた。

「…気絶させるなんて甘い考えは持たないでくれ…。
殺す気で…来てくれないか。」

カイルに何もかも読まれていた。

会うまでに、カイルは剣の物凄い修行を行ったのだろう…。

本当に無駄の無い動きで、クラウスの剣を受け流す…。

「今度は…僕から行くよ…！！」

カイルはスピードまでは強化されていなかったため、動きは読めた。

だが、そこからだった。

「…！！」

物凄い連剣撃が襲ってくる。

全ての剣を受け流す事はもはや不可能だった。

「ぐっ…！！」

クラウスの左胸辺りが斬れた。

だが、やはり痛みも無く、血も流れなかった。

「そういう体…正直羨ましかったよ。」

「体に異物が入り込んでくるのも、いい気持ちではないんだがな。」

「そろそろ…遊びは終わりですよ。」

キルがどこからともなくカイルの後ろに出てきた。
「キル…！？」
次の瞬間、カイルの胸から血を帯びたキルの手が出てきた。
…胸を貫いたのだ。
「カイル…！！」
クラウスは倒れるカイルを受け止める。
「貴様…！！」
「友達相手に本気も出せないような隊長は必要ないんでね。」
キルは冷たい表情を浮かべる。
「隊長…！？」
「奴は、元二番隊隊長、カイル＝ソルネット。
どうやら、エヴァーノを乗っ取るとか考えていたらしい。
全く、笑っちゃうよね。
エヴァーノを乗っ取れば平和が訪れると思ってるんだから…。」
キル口から赤い糸が垂れているカイルに冷たい笑みを投げかけ、言った。
「…そうか…。」
「クラウス…ごめ…ん……。」
カイルは完全に事切れた。
クラウスは、優しくカイルを寝かせた。
「…どけよ。」

「どけと言われてどくはず…！！？」
クラウスの周りに禍々しいオーラが漂っていた…。
「ま、まさか…お前…！！」
クラウスが、キルの首を持ち、そのまま持ち上げた。
「ぐ……あ…！！」
「カイルが世話になったな…
…そのまま死ね。」
クラウスはキルの首を握りつぶした。
キルの頭が空しく転がった…。

ゼアとイヴァは、ようやく王の間に続く道に辿り着いた…。
「な…カイルと…あれは…エヴァーノの将…！？」
ゼアは、すでに事切れているふたつの死体を見た。
「…どうやら、魔石の力を解き放ったようだな…。」
「カイルがやられて…という感じだろうか？」
「いや…カイルは敵側についているはずだろう。

もう用無しになったという事も考えられない事は無いが…。」
「…そんな事を考えている暇は無かった。
急ごう。」
イヴァは頷いた。

王の間を扉が開いたかと思うと、禍々しいオーラが注ぎ込まれてくるかのようだった…。
「殺しに…来たぞ…。
キヴァード…レイ!!」
クラウスは、ギンとキヴァードを睨みつけて言った。

「それは無理だな…!
何故なら、私の魔力はすでに転魔鏡を発動させるほどに回復しているからだ!!」
キヴァードは、左隣に置いてあった転魔鏡を発動させた。
「また、飛んで行くが…!!?」
クラウスは、全く動じていなかった。
それどころか、真っ直ぐキヴァードに向かってゆっくり進んでいる。
「ば、馬鹿な!?」

「俺にそんな小細工は効かない…。」
キヴァードに触れるほどに近づいたクラウスは、キヴァードの首を持ち、そのまま持ち上げた。

「貴様も…奴と同じ運命に歩ませてやろう…！！」

「クラウス！！」
ゼアとイヴァの叫びも遅く、キヴァードの首が転がっていた…。

「…！！！」

「…クラウス…君…。」

『よくやった、よくやったぞ、クラウス…』
クラウスの頭上に、全身を黒い布で覆った何者かが現れた…。

「何者だ…！！」
クラウスは思わずたじろいだ。

「ま、まさかあの姿は…！！」
イヴァが思わず言った。

『そうとも…イリアの子孫よ…
我こそが…カオスだ…！！』
皆の体に電撃が走った…。

『ゼアの父…キヴァードを殺した名誉を称えてやろうではないか…。
だが、ひとつ教えておいてやろう…。
キヴァードを操ったのは…この我だ…！！』

「な…なんだと！！？」
クラウスの驚きようにカオスは大笑いをする。
『ふはははははは…！！
いいぞ、その顔だ…！！
我はその顔を望んでいた…！！』

「カオス…！！
貴様！！！」
ゼアはカオスに向かってソニックブームを放つ。
だが、カオスが手を翳すとその剣撃は消滅した…。
『父を操られていた事が悔しいか？
それとも、その父に殺されかけた事が悔しいか？
それとも…愛する者に裏切られたからか…？』

「…！！！」
一気にゼアの顔が引き攣った。
『もちろん…奴も我が操った。
あのときの事は全て見ていた。
実に面白かったぞ…！！』
カオスがまた笑い出す。
人というものを否定するかのように…。
「カオス――――！！！！！！！！！！」
クラウスは己の総てを解き放った。
『そのオーラで…我に勝つつもりか…？』
カオスが手を振ると、クラウスのオーラは吹き飛んだ。

圧倒的な強さだった…。

「ば…馬鹿な…！！」

『ここまで良くやったことを敬して…ヴェインまで全員送ってやる。
また闘う日を楽しみにしているぞ…！！』

三人と数隻の船は、亜空間を通じヴェインに強制送還されるのだった…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7031a/

罪と罰～混沌の魔石～

2010年10月28日07時20分発行